七X329

1348

185
641

村井介石著

基督之心

警醒社書店

特29
897

帝國圖書館藏

例

不肖固より其人に非ずと雖ども。今や、我國基督教會の傾向を察し。又我國社會の狀態を眺め。胸間耿々たる一片の微衷、默せんと欲して默する能はざるものあり、乃ち敢て此書を著す。

一書中說くところは、專ら「基督の心如何」の一點に在て存す。若夫れ此心の養成法、幷に此心の運用法等に關しては別に卑見なきに非ず。請ふ之を他日に說かん。

一愚直の僻するところ。或い露骨に過ぎ、或は無遠慮に失したるものあらん。讀者請ふ辭を觀ずして心を察せよ。

明治文庫

一今や風潮旋回。人心擾々。國家多事。而して政教次第に不振。此の時に當て。余輩基督の心を說く。蓋し大に待つところのものあればなり。

一此書主としてヒューマニチーを說く、若夫れヲビニチーに至りては請ふ他日の著に讓らん。

明治廿四年六月

著者識

基督の心

目次

一神の心……二頁
一基督の心……七頁
一基督信者の心……二十二頁
一基督教の心……三十七頁

一基督の心と眞誠の豪傑……六十五頁
一基督の心と信者の覺悟……八十二頁
一基督の心と我國の現狀……九十五頁

基督の心

松村介石著

汝等基督の心を以て心とせよ

ヒリピ二章五節

夫れ基督の心とは神の心なり、神と基督との心とは基督教の心なり、而して基督教の心とは即ち基督信者の心に非ずや。然則單に基督の心と云ふとも、其實は基督教其物を指して云へるありと知るべし

敢て問ふ其所謂る神の心、基督の心、基督信者の心とは果して何ぞ。曰く請ふ先づ神の心より之を說かん

神の心

聖書に曰く神は其獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へりと(約翰傳三章十六節)蓋し其意たるや、神は此の罪惡の世界、此の牧ふ者なき群羊の民、此の墮落たる、此の迷ふたる、此の憫然なる此の滅亡んとする人類一般の狀態を眺めて、其心如何にも忍び難く、之を救はんと欲し給ふの至情よりして、遂に其獨子なる基督耶蘇を此世に降し給ひしとの義あり。それ禽獸すら尚ほ其子を愛す、罪ある人すら尚ほ之を愛す、ましてや獨子一子と云はゞ則ち己が身に代へて之を愛す、これ人情の常なりとす。然るに神は無上の慈父にてましましながら尚且其獨子をも惜ませ給はず、剩へ之をして十字

架の苦をさへ受しめ給ふに至れる、其心意果して如何ぞや。神は其子を愛し給はず、空しく之をカルバリーの邱陵に見棄させ給ひしか(馬太傳廿七章四十六節)、曰く何ぞ然らん、思ふに神がその獨子なる基督耶蘇を此世に降し給ふに當てや、實に斷腸の思ひをなしたまひしなるべし、實に無限の悲痛に沈づませ給ひしならん、これ人情より推し奉りて知る所あり、然るを尚且つ之を忍ばせ給ひて、而して之を世の人に與へ給ひしゆゑんものい、抑も如何なる理由やある。曰く神は人類の狀態を眺めて之を救はんと欲し給ふの至情に堪ゑず、忍ばんと欲するも忍ぶ能はず、堪へんと欲するも堪ゆる能はず。愛腸内に熱血を翻へし、慈眼外に紅涙を湛へて

而して遂に禁ずる能はず。乃ち唯一の救法として當に獨子を賜ふの止るを得ざるに出でさせ給ひしに外ならざるなり。即ち偏へに人類を憫み給ふの深き、其罪惡を救はんと欲し給ふの厚きに出でさせ給ひたる愛の自然の結果のみ。蓋し神が基督耶蘇をして空く無窮の苦界に沈ましむるか、但は又彼をして徒らに十字架上の露と消ねさせしめんにか、是れ亦忍び給はざりしところならん、設ひ如何ほど人類を愛して之を救はんと欲し給ふとも、愛する獨子を永遠に棄て給はんとは、義に於ても情に於ても、これ決して爲し遂げ給はざりしところなるべし、然ればにや「神か其後甚しく基督を崇めて諸の名に超る名を彼れに予へ給へり、此は天

に在るもの地に在るもの及び地の下に在るものをして悉く耶蘇の名に由りて膝を屈ましめ、且つ諸の舌をして悉くイエスキリストは主なりと稱揚さしめんためなり、云々と（ヒリピ二章九―十節）聖書に見えたり。乃ち義於此乎始て全く情於此乎始て滿つ。然りと雖も其人類を打眺めては至愛の情の禁じ難く、遂に其獨子をさへ賜ふほどに至りたる其神意や即ち吾人をして身魂を捧げ出して而して之を拜せんと欲するの至誠にたへざらしむるもの也。たとへ三十三年の日月は神にとりては短しとは云へ、無限の愛の父にとりては一朝も一旦も殆ど其情に堪へさせ玉はざりしあるべし、是人情より推し奉るとことなり、然るを尙は且つ之を

忍ばせ玉ひしゆゑんものは。即ち偏へに我等人類を愛し玉ふの深き大御心によらずんはあらざるなり。

然則讀者は已に神の心の如何を知られしなるべし。則ち人類の罪惡を觀て之を悔い改めさせんと欲するの至情に堪ゑず、人間の悲痛を聞て之を救はんと欲するの愛心に堪ゑず、遂に其身を犧牲に供す、是れ即ち神の心たるあり。然則敢て問ふ。我等今日神の心を以て心とすと云ふ者、果して眞に之れ有るや否や。それ罪惡の人や、疾苦の民や、今尚は現に此に在り。都會に在り、田舍に在り、宮殿に在り、鄙屋に在り、而して滿目これならざるはなし。然則苟くも神の心を以て心とすと云ふもの、果して斷腸の思ひあるや否や、果して之を救

はんと欲するの至情に堪ゑざるや否や、果して其身を犧牲に供せんと欲するの覺悟あるや否や。蓋し基督信者たると信者たらざるとは偏に此心の有無の如何に由て決す。此の愛心、此誠心、此の義勇心、此の犧牲心、此神心の消長如何に由て分る、此の人情的此の天道的此の愛心的なる膽腸の如何に由て判ずべし、他の又論ずるに足らざるあり。

基督の心

聖書に曰く基督は神の體にて居りしかども自ら其神と匹くあるところの事を棄て難きことと意はず、反て己を虛うし僕の貌をとりて人の如くあれり、既に人の如き形狀にて現はれ己を卑し死に至るまで順ひ十字架の死をさへ受く

るに至れりと(ヒリピ二章五、六、七、八、節)、蓋し其意たるや、基督は父と共に在して同じく、此罪惡の世界を觀、同しく此憫然なる人類を眺めて、而して義怒と哀憐とに堪へず、若し夫れ彼等の爲めたらんには、如何なる苦をも厭はずとの、至愛の心、意、内に興て禁ずると能はず、假令天父の命あくとも、自ら進んで救贖の道の大任に當らんと欲し給ふ所あれば、乃ち奮然身を提して此世に降り、畏てくも僕の貌にて現はれ、而かも甘んじて十字架の苦をさへ受けさせ給へりとの絶美の眞理を云へるあり。然則神が基督を此世に降し玉ひしと云ひ、又基督が此世に降り玉ひしと云ふとも、畢竟る處は神と基督とが深く此人類を憐れみ玉ふ所より、遂に其身を犧

牲に供し玉ふに至れりと云ふに外ならざるあり。茲に父あり眼前其子の罪惡に陷ゐり苦境に沈み而して將にみすゝ滅亡んとするの狀態を見ば、其心果して如何、若しも叶ふ事あらば我身にかへても之を救はざれば止まざらんとす、是れ豈神が人類に對し玉ふの心に非ずや。茲に兄あり目前骨肉弟妹等が刑罰の途に向ふを見ば、其情果して如何ぞや、若も之を購ふことを得ば、如何なる苦難をも避ざらんと欲す、是豈基督が人類に對し玉ふの心にあらずや。一括以て之を結べば、凡そ神と云ひ基督と云ひ、其獨子を給ひしと云ひ、其寶位を棄て難きこととし玉はざりしと云ふとも、要する所は、此人類の狀態を見て、至愛の情、内に溢れ至憐の心、外に發

して、而して遂に其心が澎然此世に現出したるものありと云ふに外ならざるなり

人或い曰はん、汝妄りに想像を逞うする勿れ、或い神の心をかくなりと云ひ、或は基督の意、志をかく〳〵と云ふ、然れども何ぞ知らんや、神の心や廣大あり基督の意志や深奥あり。聖書に云いずや、神の心は遙に人の上にあり、神の思想は人類の得て知る能はざる所なりと(イザヤ五十五章八—九節)。然を汝妄に人の心を以て神を推す、是神を以て人と爲なり、汝基督を以て神の子と云ふ、然れども其所謂る子たりと云ふや、豈人類の如き子ならんや、三位一体の議論己に明ならざるに非ずや、然るを汝徒に人を以て神を量り神を以て人

とおし而して其心情は斯々なりと云ふ。欺兒の淺說、大人に向ふて語る可からずと。曰く其答辨や寔に易々たり。如何にも神の智慮や高くして遠く、其心意や幽にして邃かならん、誠に測り知る可らざる者有て存す、然りと雖も如何にせん、既に人情を以て神を推す事能はずとせば、將た何を以て之を推す可き、我已に人たり神に非ず、人情を以てするより外、乃ち神を推すこと能はざるに非ずや

然るを世には以前の如き議論を以て神を人情の外に措き、至極冷淡の事に之を辨へ、たとひ神を愛ありと聞とも人の愛の如きものあらずと思ひ、たとひ神を父ありと聞くとも人類の父の如き者とは思はず、其憐れみ玉ふといふも其愛

しみ玉ふと聞くも、更に感情を動かさず、徒らに哲學的に之を論じ而して自ら結晶的基督信者たる者、若しくは邈然たる凡神的基督信者たる者亦た往々にして尠からず、人若し此に至らんか、決して神と交通することを能はす。即ち祈禱すること能はす、感謝すること能はす、讃美すること能はす、而して遂に聖書の譬喩を愚弄するに至る。此人や目下彌〻其員數を增さんとす、偏理の谷に陷りて而して累々枯骨たる者將に眼前に遮ぎらんとす、吾人は實に竦然として寒心す。吾人固より神意神政上に於ける種々の難題に答ふること能はざるなり、然れども此等は皆所謂不可思議の中に措き、只それ信仰に依て生んと欲す。余れ已に神を父なりと聞き、又愛な

りと聞く、即ち我人類の愛父の如く又た愛母の如き、惠ある、憐みある情けある温き慈悲心のもの、即ち我が爲めには其生命をも惜み玉はざりし程なる恩愛の神と思はざるを得ず。然而して已に此心の者、此愛の者を神なりとせば、則ち此の憐れある人類を觀て之を救いんと欲し玉ふの心の切なるや、當に余輩が前段に想像せしが如きものたらざるを得ざるに非らずや。天神誠に愛あるか則ち基督をつかはし玉はざるを得ず、基督誠に愛あるか則ち此の世に降らざるを得ず。是れ人情の必然と認めざるを得ざる處なり然るを世には樣々寒理的の神學者あり、曰く神が基督を降し玉ひしはかく〳〵の理由に在り、云かく〳〵の譯に在りと、而して種

々に説明を加ふ。余輩より之を見れは此等は皆生ける恩愛の神を知らざるものあり。若夫れ既に神を愛なりとせば神が基督を降し玉ふに於て何の六ヶ敷き理屈やある何の喋々しき説明をや要せん、即ち親か眼前其子の溺るゝを見て之が爲めに其身を忘れたる自然の結果に外ならざるなり。此を以て吾人は基督の天より降り玉ひしをと疑ず、又神が救主を降し玉ひしことを疑はず。若し夫れ基督降らざりせば吾人は寧ろ愛ある神の存在をこそ疑はんと欲す。然りと雖ども基督降る矣。而して吾人は愛ある神の存在を疑はず。聖書に曰く未た神を見し人あらず唯其生み玉へる獨子即ち父の懷に在る者のみ之を彰せりと、又曰く我等其榮を見

るに實に父の生み玉へる獨子の榮にして恩寵と眞理とに充てりと(ヨハネ傳一章十八ト十四節)。然り此恩寵此眞理果してそれ何處より來る。木より來りしか、石より出しか、土よりか、空よりか、曰く、死物は生物をすら出す能いず、何ぞ能く聖人を生まんや。然則何處より來る、物必ず原因あり、善樹は善果を結び惡樹は惡果を結ぶ。於此乎知る。恩寵と眞理に充てる者の來る、即ち恩寵と眞理とに充てるものゝ之れを生むことあればなり、之を遣すことあればあり

櫻木を碎きてみれば花もなし
花をば春の空にもちけり

此故に基督を見る即ち神を見るあり(ヨハネ傳十四章七ト

十節)、基督の言を聽く、即ち神の言を聞きたるあり、基督の心を知る、即ち神の心を知りたるあり

然則如何にして基督を見、基督の言を聞き、又基督の心を知るべき。曰く來れ、三位一体の議論は今尚は不可思議中に在るにもせよ、基督の神人性は未だ知るべからざる者有て存するにもせよ。彼が形、彼が言、彼が心は即ち知り得て餘りあるなり。夫れ彼は其始め神と匹くあることをも棄て難きとゝせず、人の貌形を取て此世に現はれ玉ひし以來、枕する處さへ定まらず、苦難到る處に伴ひ、或は罪人の友と呼ばれ、或は税吏の徒輩と晋られ、惡魔につかれたる狂人と云はれ、カイザルに叛むく國賊と詈ひられ、而かも爲に其志を變せ

ず、聊かも敵人を惡むことなく、言語諄々、説理懇々、慈母が惡兒を諭すが如く、祖父が子孫を戒むるが如く、或は厳に或は温に、或は睨み、或は撫で、慈愛の心、内に溢れて、涙滴淋漓、其慈眼を潤ほしたる有樣、實に吾人をして一思だも魂飛び氣溶けて、而して恍然其跡を辿らしむるもの有て存するなり、其の彼が橄欖山上の岩に踞して、遥かにエルサレムを望見し、愛民憂國の情、禁ずること能はず、而して「オー、エルサレムよエルサレムよ」と四ひ玉ひたる心を察せよ。マリヤ、マルタが泣き悲しみて「オー主よ何故來り玉ふことのそれ晩きや、若も主にして在したらんには、我兄弟は死せざるものを」と倒れ沈みて泣きしとき、哀憐の情に堪ゑ玉はず、共に俱に泣き

玉へりとある(ヨハネ傳十一章三十二節――四十二節)此一節を味ひ見よ。北邙下邊、三五の人あり、前者は墓標を持ち中者は柩を擔ひ、寡婦悄然として其後に從ふ。基督の心、乃ち此が爲めに破れたり、而して曰く「アヽ寡婦よ、悲む勿れ、汝の子は生くるあり」と。

讀者よ深く其心を味ひ見よ、奸淫せし者あり、長老之を憤り、佛々器々として曳きずり來たり、將に石にて擊んとす、基督曰く汝の中罪なき者之を擊てと、長老耻て去る、於此基督の曰く汝の罪を定むる者はなきか、女の曰くなし、基督の曰、さらば安全にして行け、再び罪を犯す勿れと(ヨハネ傳八章一節――十一節)。何ぞ其語の嚴の如くにして若かも其憐情に

溢るゝや。嗟乎此れ基督の言なり、行なり、心なり、此心の動くところ、盲者は見、跛者は立ち、聾者は聞き、癩病は癒され、而して貧き者は福音をきかせらる。此の心ベテスダの池に行く、即ち三十八年病みさる者忽ち癒へぬ。此心鬼につかれたる者に遇ふ、其鬼即ち叫で出でぬ。此心罪人に遇ふ、乃ち彼れ悔改めて神に歸れり。此心飢ゑたる者に遇ふ、乃ち之を飽かしめたり。此心牧ふものなき群羊の如き民に遇ふ、乃ち哀情に堪ねざりし。此心偽善者に遇ふ、乃ち泣て之れを警しめたり、此心迷者に遇ふ、乃ち忍て之を敎へたり。此心縛につく乃ち優然として更に怨むる處なかりし。此心十字架につく乃ち天を仰ぎ其敵の爲めに祈て曰く「オヤ父よ願くは彼等を憐

れみ玉へ、彼等は其爲す所を知らざればあり」と。嗟乎、何ぞ其心の美にして偉にして神なるや。口に出れば則ち山上の教訓となり。放蕩息子の譬諭となり。行に顯はるれば、則ち枕するところなく、食事する暇さへあらず、遑々として行き、孳々として止まり、豪然として立ち、泰然として死す。此れ基督の言なり、行あり、心なり、而して是れまた神の言、神の行、神の心たるなり。

只だそれ有レ之。此故に我等始めて神に謝し、神に祈り、神を讃美し、神を愛し、而して又神と基督との爲めに身命をすら捧げんと欲する心意の起るなり。乃ち之に接するものとあり。之に親むものとあり、之に化せらるゝ者とあり、而て遂に自

己其心たるに至る。語を替へば我等も亦神の如く、基督の如く、人を愛し國を愛し之を救はんと欲するの至情に堪ねざらんとす。貧人あり陋巷に泣く、乃ち之を扶けんと欲するの情に堪ねざらんとす。孤兒あり道路に飢ゆ、乃ち之を救はんと欲するの情に堪ねざらんとす。病むものあり。縛らるゝ者あり。苦しむものあり。悲しむものあり。乃ち行て之を見舞ひ、之を解き、之を慰めんと欲する至愛の念に堪ねざらんとす。於是乎我心即ち基督の心となり、基督の心、即ち我心となり、而して始めて眞正の基督信者たるに至る。かの人情外の冷論者、彼の商業的の傳道者、かの俗人的のクリスチアン、そもそも何の關係あらんや

基督信者の心

人或は曰はん、汝喋々する勿れ。苟も基督信者たらんもの、誰か其等を知らざらんや。曰く之を知る十分あらず、悪魔も之を知る、而して知て戦けり。神學者は常に能く之を稱す、而かも此心の乏きものあり。之を知る十分ならず、深く之を感せざるべからず、之を感ずる十分ならず、親しく之を味はざるべからず、之を味ふ十分あらず、漸然之と同化し來りて而して遂に己れ自ら其心となり、最早や基督の心にあらず、最早や神の心にあらず、最早や聖書について學ぶを要せず、早や人に聽て悟るを要せず、即ち是れ我が自己の心なり、性情なり、神魂なりと云ふに至らざるべからず。曰く固よりな

り。苟も基督信者たらんものは、即ち其心のものたらざるべからず、今更汝の説明を待んや。曰く然り、然りと雖ども悲哉、汝が所謂る固よりなりと云へる此心の今尚は受洗者の中に乏しきは何ぞや、教會の中に乏しきは何ぞや、宗派の中に乏しきは何ぞや、祈禱者若くは讀聖書家の中に乏しきは何ぞや。曰く何ぞ傷まん。十二使徒の中にすら、ユダありき、麥田に必ず雀麥を交へ、雑草必ず花園に老ゆ。曰く嗟乎、其言や果して基督の心なるか。君已に冷然之を云ふ。果してユダについて嘆く心は起らざるか、果して雀麥を見て憐む心起らざるか、果して葉ばかりある無花菓樹を見て悲しむ心生ぜざるか。蓋し基督は君等の如く決して冷然彼等を評し玉はざり

し。無數の感慨其内に燃ゑ嗟嘆限りなくおもしたりき。然則今日此の心のおきものを見、其心の行われざるを見、此心の死せるを見て、果して君等の心熱せざるか、君等既に冷然之を云ふ、即ち亦た此心を要する一人ならずや

基督はエルサレムを望み見て、其亡國の徵あるを察し、オー、エルサレムよエルサレムよ汝何ぞ悔改めざるやと、悲泣の涙にかきくれ玉へり。然則苟も基督の心を以て心とすと云ふもの、果して今日我國を顧みて危懼憂慨にたへざるや否や。勿論我國を指して亡國の徵ありと云ふには非ず、然と雖ども僞善跳梁、私利跋扈、政黨野に裂け、内閣朝に動き、教育界は擾々、商業界は慌々、民益ゝ殖ゑ、富益ゝ減じ、盲目の保守

黨は世に時めき、無謀の狂士は市に濶歩し、而して遂に國家の大事を惹起すにいたり。我れもし正か、魯軍百萬寄せ來るとも、何の避くべきとか、之れあらん。然りと雖とも彼れ皇太子は十分信を我におき、百萬の貔貅を備へおがら、猶且つ單行人力車に御し、而かも怡然として過ぎられしを、我れ暴戾にも之を傷く。たとひ一狂人の處爲にもせよ、又事の角おく收りしにもせよ、此等の事や實に輕々に看過すべきものにあらざるおり。蓋し物皆原あり、事必ず因あり。余れ近頃の日本を觀るに、情おくも舊癖の客氣に馳せ、國家教育と叫ぶと思へば、則徒に外客を罵り、國粹保存と稱ふと思へば、則ち徒らに外物を排斥し、而して更に國家長久の策を謀らず。

若夫れ此まゝにして進まんか、狂人は益〻殖え、暴徒は益〻顯れ、而して遂に百年の國家を誤るに至らん。殷鑑彰々、其跡淋漓、載て萬國史の上に在り。嗟乎、此を思ひ彼を想へば、憂國の情轉た禁ぜざるものあつて存するを見ん。然則今日基督の心を以て心とすと云ふもの、果して此等の憂國心を以て、溢るゝや否や

基督は貧者を憐れみ、病者を勦はり、無告者を扶け、罪人を購ひ、偽善を貴め、貪慾を斥け、而して遂に其敵をすら愛し玉へり。苟も其心を以て心とすと云ふもの、果して其等の實行あるや否や。今みれ試みに日暮九段坂頂に到りみよ。西には芙蓉の夕日を帶び、潔然として高天に聳ゆるの有樣。實に得も

云はれざるものあるをみん。東は廣々たる大都會、尖塔空に競ひ立ち、屋瓦稠々全地に滿つ。其繁榮の狀態、實に限りなきが如きをみん。南は所謂る舊都城、三百年來の太平を維持し、勢を極め威を彊め、飛鳥を落したる將軍の墟址、而して明治の今日に至りては、即ち我聖武なる天皇陛下が新たに宮殿を築かせ玉ひしところにして、松柏蒼々、杉檜蔚々、石壘峨々、輪奐堂々、見るもの爲めに壯快を覺ゆ。然而して若夫れ盛春の時に當らば、則ち北には萬朶の爛熳として妍を戰はし、美を鬪はし、櫻花の滿天に映ずるものあるを見ん是れ其の周圍の大觀あり

其れ然り然りと雖ども、今や坂頂に佇みて、而して眼前の往

來を觀じ來れよ、其の滿目に觸るゝところのものは、抑も何物ぞ。曳々として青氣を吹きつゝ牛と共に登り來るもの。彼れ人力車夫に非ずや。肉落ち骨出で憔悴の顏色、枯槁の形容、而かも尙は以て死する能はず、磯泡を吹き、煙管を擔ひ、塵芥の車を曳き、割烹の店を疊み、而して愁然として行き過ぐるもの、彼れ何人ぞ、彼れ何處にか歸る、彼等には妻あらん、已に妻あらば子もあらん、思ふに此妻や此子や、薄暮門に佇ずんで、彼等の歸るを待ち受けつゝ、將に米店に走らんとす、然れども往々失望の聲に會ひ、徹宵俱に餓に泣くもの、果してろれ幾何ぞや。其目は憂ひ、其眉は縮み、首を傾け手を垂れつゝ、忖々悄々として歩み行くもの、彼れ果して何人ぞ。浮世の波

に漂ふ中、機械の能を取り損ね、あはや、沈まんとするものならずや。乞丐の徒も行き、老耄者も行き、丁稚も行き、小僧も行き、貧生も行き、勞役者も行く、而して悉く皆不平失意の人たるを示す。畧言以て之を敝へば、滿目觀るところのもの多くは皆下等の民族、憫然なる人類、襤褸の徒、獸類の奴、羸弱の人種、失意の朋輩のみ。然而して偶々馬車あり、揚々として來るを見れば、徒らに往來を叱咤し去り、更に此等に向ふて些少の憐情をすら與へざるものゝ如し。是れ豈に我國の帝都九段坂上の實況に非ずや。其周圍や彼れの如くろれ美なり。而して其內情や。此の如く其れ慘沈り

嗟乎吾人は基督の心を以て心とすと云ふ。然則果して九段

坂上に立ち而して不忍の心を擡起すとなきや否や。彼の民や同じく我が國の民に非ずや。我同胞の中に非ずや。然則其泣くをきゝ、其衰るを見、其餓ゆるを知り、其亡ぶるを認めて、而して此れが爲めに己れを與へんと欲するの愛心を奮ひ興すとなきや否や。苦夫れ九段坂上に立ち、此等の狀態を眺めながら、尙且つ心を動かさず、平然として過ぎ去るものは、基督の弟子に非ざるなり。吾人等い實に此等を見、此等を聞き、此等に付て想ひ回らし、如何にして此等を此世より救ふべきか、又來世より救ふべきか、政治上彼等の爲めに如何なる策を立つべきか、教育上彼等の爲め如何なる道を開くべきか、宗教上如何なる福音を宣ぶべきか、生産上如何なる業

を授くべきかと。晝夜心情を傷むるの外、尙且つ將來を憂想し、如何に此の貧き弱き低き國民を以て海外の巨人と競爭すべきか。內地雜居の問題、獨り議論の上にのみ止まらざらんとす、東洋の疑問必ず實地に解かるゝの時正に將に來らんとす。此時に當り如何にして此國民を救ふべきか、富嶽高きも以て我國を護るに足らず、櫻花爛熳たるも以て我民を悅ばすに足らず。眼前に此病者を見、而して將來に此病國を思へば、則ち鐵腸も裂け、石膽も當に碎けざるを得ず。然而して是れ亦た眞正基督信者の心腸に非ずや

然るに獨り怪しむ。今や此心を以て心とすと云ふ基督教會の中に於て、基督教徒の中に於て、往々此心に缺乏を告げ、祭

禮の盛んならざるあきにあらず、儀文の嚴格ならざるあきに非ず、宗派の競爭の甚しからざるなきに非ず、泣音の祈禱の凄然からざるあきにあらず、聖書研究の八釜敗からざるなきにあらず、集會の多からざるあきに非ず、矯風慈善廢娼會等の運動の世間に聞ざるなきにあらず、若かも尚は且つ此心の、神の心の、基督の心の、眞正基督信者たる不忍の心の、眞愛の心の、ヒューマニチーの心の、未だ十分活動せざるものあるを見るは抑も何ぞや

露國にトロストイと云べる人あり、現今世界の俊傑あり、彼れ若き時基督信者の一人たりしが、長ずるに及んで種々の疑問を起し始めたり。曰く我れ神を愛なりとき、又基督を

生命の力なりと聞きたりし、此故に凡そ基督信者たるものは、皆悉く愛人愛國の精神にて滿つるものなりと信じたりき。然るに今や彼等の眞相を觀じ來れば、我が信仰や妄あり き、彼れ牧師能く說く、彼れ敎師能く論ず、然れども其心事の高明ならざる、其見識の狹隘ある、其人物の凡俗ある、其嫉妬心の熾んある、一に何ぞ其れ甚しきや。彼れ敵をすら愛せよと講ず、然れども其朋友をすら讒して止まず、彼れ自から獻身犧牲を說く、然れども唯だ利己をのみ是れ謀る。陋の又陋、卑の又卑、我は嘗て彼れが一たびも國家の爲めに涙を流せしことあるを聞かず、愛人の爲めに己を忘れしことあるを聞かず、其傳道に熱心なるや、即ち宗派心の强きがためなり、其

萬業に奔走するや、畢竟自己が功利の爲めのみ。是れ果して基督の心か、是れ果して基督教か。然則基督教たる、到底有名無實に過ぎず。且つや翻つて又教會を觀察すれば、或は人を訴ふると云ひ、或は口論を起したりと云ひ、或は詛ふて屈したりと云ひ、或は怒て去りたりと云ひ、醜聞喧しく耳朶を打つ、是れ果して基督の教會か、かの有名なる客嗇家またキリスチヤンの名を帶ぶるに非ずや、かの水臭き寒冷の人物またクリスチヤンの中にあらずや、かの狡猾なる狐狸また祈禱會に臨むにあらずや。彼れは婢僕に親切あらず、婢僕爲めに密かに爪彈す、然れども之を知るや、知らざるや、毎朝祈禱會を家内に設け、而して婢僕に說教す。彼れはサマリアの途

に盜難者を見棄て、門前の外に外服を乞ふものを逐ひ、而して熱心に愛を說く、是れ果してクリスチアンか。此等の問題頻々來りて彼を襲ひ、彼れの胸間に積み重なり、除かんと欲して除く能はず、避けんと欲して避くる能はず、而して彼れ遂に信仰に死せり。たとひ今日は眞正の基督教を自得して、非常の熱信家たるに至りしとはいへ、其元は實に此の如くありしなり

シユライアルマヘルは十九世紀神學者の泰斗なり、然ども彼れは嘗て當時の基督教を觀て、如何にも蠱惑措く能はず、其僞善者、其の俗物、其卑劣漢、其無情輩の滿るを眺めて、宗教ある問題に頭腦を惱まし、獨り自ら尋ねて曰く、それ宗教と

は經典を讀むに在るか、祈禱を言ふにあるか、宗儀を守るに在るか、洗禮を受くるにあるか、說敎を聽くにあるか、集會に臨むにあるか、是れ皆今日總てのクリスチヤンのあすところ也、然れども彼等の中此れが爲めに善心に化せず、愛心に化せず、慈悲心に化せざるもの多きは何ぞや。「オー、余れは寒冷の理論を求めず、外形の儀式を求めず、只生命をのみ是れ求む、只愛をのみ是れ求む、見よ我れ我が手を八方に伸ばして而して同情同憐の者をこれ求む、然れども今や之を得る能はず。我手將に枯れ、我魂將に凋まんとす」と、悲しき聲にて叫びたることありし。然るに其後偶然溫意暖情の婦人を得て、其愛心に動かされたるとき。乃ち彼れ又叫で曰く、「ア、宗

敎は此に在りしと。於此乎、遂に感情的神學者の宗祖となれり。

嗟乎、噫、讀者は實に今日の基督敎會を眺めて、而してエレミヤの如き感あきか、思ふに諸君は今日パリサイ宗とサドカイ宗とに於ける基督の心を察し奉る事を得るならん、彼のヒユーム何故に彼れが如くそれ不信者の巨魁とありしや。彼の近頃沒したるブラッドロー何が故に彼れが如くそれ有名なる瀆神者とありしや、其罪固より彼等にあらん、然れども當時俗的の基督敎又其罪にあづからざるを得ざるにあらずや

基督敎の心

それ基督教とは何ぞ、曰く余れ再び答へて云はん、神の心あり基督の心なり、而して其心とい即ち何ぞ、曰く余又繰り返して之を云ん。罪惡を見て之を悔ひ改めさせんと欲するの心、憫然ある人類を見て之を救はんと欲するの心、病人を見て之を憐むの心、貧人を見て之を惠むの心、暴惡者を見て之を拂はんと欲するの心、虐遇さるゝものを見て之を助けんと欲するの心、義を聞て起つの心、美を聞て動くの心、德に感じて死するの心、弱を扶け强を挫き、正を護り邪を破り、眞理に立て動くとなく、直に處して懼るゝとなく、身を犧牲にして仁を成し、所有を散じて衆に施し、誇らず、驕傲らず、非禮を行はず、天眞爛熳、至誠一貫、意志高潔、慈心滿々、小は則ち人を愛

し、大は則ち國を愛し、人の臣となれば則ち忠、人の子となれば則ち孝、朋友となれば則ち信、婢僕となれば則ち勤、兵士となれば則ち勇。此れ即ち基督の心、而して又た基督教の心たるあり

かの儀文や宗式や教會や聖書や皆此心の爲めに存ず、譬へバ形骸の如く衣裳の如し、形骸固より必要あり、衣裳固より欠くべからず、形骸なくんば幽靈とならん、衣裳なくんバ裸體とならん、然ど雖ども心形自ら眞屬の別あり、形衣自ら輕重の分あり、心なくんば死体なり、形なくんバ廢物あり、予れ畢竟何物ぞ、予れ即ち心にあらず、手足にあらず、我が手足あり、五體や我にあらず我五體なり、恰も予を入るゝ家

宅の如し、然則かの儀式や即ち基督教の形体にして、而して眞の基督教とは即ち獨り此心たるなり、是故に此心のあるところは即ち基督教の在る處、此心の存在する人は即ち基督教の存在する人、此心の多きところは即ち基督教の多きところ、此の心の少きところは即ち基督教の少なき處あり。然則たとひ儀文を守り宗則を奉じ、神學を知り、洗禮を領し、晩餐にあずかり、教會に列すとも若夫れ此の心にして乏しからんか、此の品格にして備はらざらんか、余輩は則ち云はん、此人や基督を去ること頗る遠しと、然り而してたとひ教會に列せずとも但しは基督教を知らずとも、若夫れ此の心、内に滿ち、此行、外に顯はるゝものたらんには、余輩は寧ろ之を

基督教に近きものありと云はんと欲す。若しくゝ基督信者と云はんと欲す、此れ即ちボーロが羅馬書第二章の二十六節に「是故に割禮あきものも、若し律法の義を守らば其割禮なくとも割禮せりと謂はざるを得んや」と云ひしに同意たるなり

古昔唐土に荆軻と云へる義俠あり、暴君秦の始皇帝を刺さんと欲し、途次易水を渡る、乃ち謠ふて曰く、風蕭々兮易水寒。壯士一去兮不復還と。余輩は一般刺客の不心得を憫れむものあり、國家の爲めに之を惡む。此の故に荆軻が始皇を擊つに於ける政治上の道德は暫く此に論せざるべし、然れども誠や荆軻が人民の塗炭に苦むを憐れみ、暴君汚吏の跋扈を

惡み、彼を救ひ、此を除かんと欲するの眞情にたへず、日夜憂憤、腕を扼する折柄、偶々義士の來て大任を托するあるにあひ、益々感激措く能はず、乃ち進んで其身を殺さんと欲するの覺悟を極めたるものありとせば、其人を憐れむの心、其暴を憤るの心、其義に感ずるの心は、寧ろ基督教に近きものありと謂はざるを得んや。大鹽平八郎は暴擧に出で畢に謀叛人の汚名を歷史に留めぬ。彼れ官廷を蔑如し、國法を紊亂す、其罪如何にも輕からざるべし、然りと雖ども其眼前餓に斃るゝもの多きを見、其到る處に悲泣の聲を聞くに當りて、憫情竟に禁じ難く、乃ち

新衣着得祝新年　　巽餅味濃易下咽

忽思城中多菜色　一身温飽愧于天

と諦ひながら、直に家財を賣却し、其金錢を八方に散じ、而て窮餓を救ひたる心意、寧ろ基督教に近きものにはあらざるか。彼れ富豪に說くに、人倫を以てし、正に當然の義務を盡すべしと云へり。然ども人面獸心の奴輩等い、更に避て之に應せず、於是乎、去て奉行に迫り、論ずるに公道を以てし、正に仁君たるの義務を盡すべしと云へり、然れども人民を土芥視するの曲物、更に斥けて之を容れず。兎角する中、民の餓死するもの益々夥く、川流屍を漂はし、市上餓莩を横たふるの慘狀を目擊するに當て、遂にいよ〳〵忍び難く、其の敗軍を知りながら、尙且つ旌旗を擧て擊て出で、潔く義死を遂げ了は

りたるの一事は、豈寧ろ基督教に近きものと謂はざるをゝんや

彼の荆軻や此の大鹽や余輩は更に其擧を讃せず、然れど其耿々たる一片の義志、禁せんと欲すも禁ずる能はず、遂に其身を殺して悔ひざりしゆゑんの點に於ては、即ちクリスチヤンたりと云はんと欲す、之をかの徒らに洗水を受け、パンと葡萄酒とを飲み食ひし、アーメンと和し、讃美を唱へて、而かも義志なきものに比するに於ては、其相違せる果して如何、一は洗禮を受けたる不信者あり、而して一は洗禮を領けざる信者たるらん、ポーロ曰く割禮は靈に在り、儀文にあらずと。（ローマ書二章廿九節）

蓋し余輩の例を擧ぐるに誤りたらん、かの荆軻や大鹽や、心は如何にも美なりといへども、擧て以てクリスチアンに適すと云はゝ、或は非難を免がれざるべし。然則孔墨を擧げん、此二人の亂世に生れ蒼生の兵燹に苦ひを傷み、大道の天下に廢れたるを悲しみ、治國平天下の仁政を說き、養性悟道の訣に及べり。然而てその之を說んと欲する心の切なるや、席暖まるに暇あらず、突黔むに暇あらず、遑々として天下に行き、而して窮困苦難を厭はざりし。是れ豈キリストの心にあらずや。マホメットも亦然り、釋迦も亦然り。マホメットは國民の偶像教に惑ふを見て、其愚を諭し其迷ひを解き而して一神教の眞理を教へんと欲するの情にたゑざりし。釋迦は病

人を見て之を憐れみ、老人を見て之を悲しみ、死人を見て之を悼み、ア、人生は何故かくも淺間敷にや、之を解脫するの法なきやと、案じ來れば、いよ〳〵堪ね得ず、遂に王家を拔け出でつゝ、雪山の巖窟に工夫を練り、茲に始めて佛法を開けり。彼の孔や、墨や、此の摩や、釋や、其說く處自ら異に、其敎ふるところ、同じからず、或は誤りたるもあらん、或は無智なりもあらん、然れども其本來の心を叩けば、則ち同じく人を憐れみ、世を愛し、如何にもして、此人類の身と魂とを救はんと欲するの心願にたゞさりしが、故に由れりと云ふの外、あらざるなり。而して其心即ち基督の心にあらずや。彼等は歷史上の基督を知らざりしならん、神學上の眞神を知らざりしならん、然れども彼等が胸間に在るところの神と基督とは即ち固より之を知り、之を信じ、之を拜し、此れが爲めに、其一生を捧げたるなり、聖書を與へたるの神は即ち彼等を造りたるの神なり。神學者の頭腦に宿るところの神は即ち彼等の心胸に宿るの神なり、然則其文字に由りて知る處の神と、至誠に由りて知るところの神と、果して何の尊卑やある、其學問に由て推す處の神と、其直覺に由りて悟る處の神と、果して何の高下やある。聖書に曰く凡そ總ての善事は皆聖靈の作業なりと(ヤコブ書一章十七節)。然則彼等豈亦た聖靈に動かされたるものたらざるなきを得んや。之を彼の

寒冷的、小理窟的、空式的、嫉妬的、小人的、俗物的にして而かも

物の哀れに其袂を絞ると能はざる、無情無實の受洗者輩に比するに於ては、余輩は寧ろ其眞の信者たるものは、前者にして而して後者に非ずと云はんと欲す、

然則洗禮は無用なるか、晩餐は無益なるか、教會は不必要なるか、聖書は廢物なるか、祈禱は空音か、讃美は虚聲か、神學は譫語か、凡て一切の宗式は悉く皆徒事か。曰く何ぞ然らん。それ祈禱とい何ぞ、所謂る基督の心の自然と口に發する結菓に非ずや。既に斯心内にあり、乃ち百望起り百願生ず。既に斯願望、内に存す、乃ち發して歌となり、詩となり、文となり、而して又昊天に號泣するの聲となる。是即ち眞誠の祈禱なり。然るを斯心内になく、而して徒らに言語を發す、之を是れ空音

と云ふ。然則我が所謂る基督の心にして已に我内に存すと せば、祈禱は止むを得ざるの結果と知るべし。又何ぞ其用と不用とを問ふに暇あらんや。而してかの讃美歌に於けるも亦同じく然りとす。斯心にして已に燃ゆる矣。乃ち句をとり、調をとり、自然と言外に發出し、或は泣き或は喜び、或は謝し、或は祈る、是れ即ち眞正の讃美歌に非ずや、若し夫れ斯心内になく、而して徒らに謳歌するもの、之を是れ鸚鵡的虚聲のクリスチアンと云ふ。然則洗禮は何ぞ。曰く洗禮は所謂る斯心を得たる徴として受くるものたるのみ。若夫れ斯心にしてなからんか、恰も猴首に水を注ぐと一般のみ。然則晩餐とは何ぞ。曰く晩餐とは基督自ら宣ひしが如く。基督の心と其

行とを紀念するが爲めのみ。若夫れ之を紀念しあがら。猶其の心に基督の心を宿すとなく。猶其行に基督の行を表はすとあからんか。即ちポーロが云ひしが如く。徒らに飲食するものたるに外あらず。然則教會とは何ぞ。曰く教會とは即ち基督の心の團体を云ふのみ。それ此心や人生の事物に當て、萬般の願望を有つのみあらず、相互に奬勵慰藉するの快事を好む。此故に一致團結以て事業を共にするの必要を感じ、併せて又此心を益〻熾ならしむるの法方を求む。於是乎、牧師をおき、規約を設け、而して互に兄弟姉妹と呼ぶ、是れ即ち自然の情勢而して又た其要と不要とを論ずるまでもなきことなり。然るを、若し夫れ此心にして其内に乏しく、諠譁起

り、裁判生じ、役員反目し、會員分派し、騒擾常に絶えずとせば、たとひ是非曲直が何れの方に存するにもせよ、已に眞正基督教會の實を失するものありと云はざるを得ず。則然聖書は如何、神學は如何、曰く聖書は歴史上の書物にして、神とキリストと、一個人と、國民とが、當時此の世界に顯はしおきたる言行の一部を纂輯し、以て神と基督との心意のあるところを後生に示し、後生をして亦其心意に從はしめんと欲するの目的を有するものたるに外ならざるなり。然則基督の心を學び、基督の心を得、基督の心を行ひ而して遂に身自ら基督の心と一たるに至る、是れ即ち聖書が望むところの主眼にして而して此れが記事載物に至りて、即ち其の法方

たるに過ぎざるあり。然るをかの所謂る基督の心おきものにして、而して聖書を人に教へ、基督の心を得ざるものにして、而して喃々聖書の意味を説き、之れを以つて其身を立派ある教師、人を教ゆる資格あるものと思ふものあるに至りては、謬見の甚しきものありと謂はざるべからず。使徒ヤコブ曰く、汝等多く人の師たるを好む勿れと(ヤコブ書三章一節)。然り而して又かの神學に至りても、亦同じく然りとす。神學は宇内と聖書と、人心とに顯はる、神の意、志と行爲とを攻究するものたるに外あらず。即ち學問の部に屬す。此故に人智の程度に從ひ時代に從ひ、自ら其間に變遷あらざるを得ず。彼の所謂る基督の心の如く、萬人に通じ、萬世に貫き、而し

て確定不拔なる生命的の眞理とは、大に其趣を異にするものあり。夫れ此生命にして既に在らんか、神學の意見は時々に變化するも亦た可なり。然れども若し此生命にあからんか、如何に深奥の神學家たるとも、所謂る基督の心より云へば、宗教に何の關係をも有せざるものあり。基督は智識あかりしか、學藝なかりしか。曰く否、彼れが神たるの上より云へば、宇内の事物、萬般の哲理、悉く皆彼の中に在りしあり、然れども曾て哲學者としては現はれず。却て余は道なり、眞理なり、生命ありと述べ、而して靈界にのみ、多く其心を盡し玉ひしゆゑんのものは、抑〻何等の理由ぞや。學問を蔑如し玉ひしが故か。極めて然らず。學問は人々の攻究に任せれき、人智の

發達に任せれき、而して其身は專ら人生の活泉たるべき、人魂の生命たるべき、神と基督との心の眞相を吾人に示し、而して吾人をしてまた其心たらしめんと欲し給ひしが故たるのみ。即ち基督教の神髓なるものは、學にあらずして、誠。識にあらずして、愛。形にあらずして、靈。祭式にあらずして、而して矜恤にあると示さんが爲めのみ。彼れや固より棄つべからず、然れども此れや靈魂の死活に關す。智識上より論ずれば、彼れや必ず先たらん。然れども宗教上より論ずれば、此れや必ず先たるものなり。それ已に心靈の人たらず、而して妄りに神學を爭ふ。乃ち余輩は其人を宗教家にあらずと云はん。基督の弟子に非ずと云はん

一言にて之を括せば、かの洗禮や、晩餐や、教會や、祈禱や、讃美や、神學や、凡て一切の宗式たるや。宗教上より之を云へば、畢竟基督の心の自然の發表物、若くは、此心の現象、團結、及び之を清める、爲めか、若くは之を活動せしむる爲めに設けられたる、法方手段に外ならざるあり。

ジョン、ウェスレーを觀るべし、彼れは神學者なり。一宗派を組織したる俊傑なり。而してメソデスト即ち法方家とまで世に渾名されたる人物なり。然れども彼れが其能く人を動かし世を撼かし、遂に十萬の改悔者を起し得たる最大能力のありしところは、彼れが神學に由るに非ず、組織法方に由るに非ず、規律手段に由るに非ず、全く彼れが至誠心に由る

なり。當時彼れは英京ロンドンに在り、全市の罪惡に沈むを見、人魂の次第に墮落するを眺め、之を救はんと欲する、の情に堪ず、日夜オックスフォールド大學に在て、焦心苦慮措く能はず、或い徹宵祈禱に從事し、或は「クラップ」を設けて救策を講じ、如何にもして人の一度悔い戻り、俗の一度改たまらんとを、九腸を翻し血涙を絞りたる至愛の心、不忍の心、即ち所謂る基督の心の熾なるところより、遂に奮然起て新しき福音を宣べ傳へたる自然の結果、是れ即ち獨見の神學ともなり、宗派ともなり、特別の規法体ともなりしものなり。此れや末なり、彼れや本なり、此れや体なり、彼れや靈なり。然るを若し夫れ後世に及んで、徒らに其形体理論をのみ此れ重んじ、而

てかの所謂る憂國愛人の心に乏からんか、決してウエスレーの弟子にあらざるなり。ウエスレーは曰く凡て我黨に加はらんと欲するものは、宗派の異なる、異なるを問はず、神學の議論の異なるを論せず、凡て自己を救ひ又人をも救んと欲する至誠至愛の心あらば則ち足れり、ア、歐洲中誰か我黨の如き寛大なる會社やある、あらば請ふ其を余に示せと、而して私に其度量の寛大なるを誇りたり。然るを若夫れ末流に至り、徒に遺傳の形式規律をのみ是れ墨守し、他宗派を排斥し、一致を嗤笑し、神學上少しく意見を異にするものあらば、則異端と唱へ、邪説と呼び、却て俗氣は日に長じ、陋心は次第に彌こり、而も肝緊なるキリストの心、即ち宗祖ウエスレーの大

心至愛、曾て其間に養はれず、又行はざるに至らんか。是れ魂魄なき形骸と謂はまくのみ

豈ろれメンデストに於けるのみ然からんや。プレスビテリアンのカルビンに於ける。ノックスの清教徒に於ける。クエーカルのフオックスに於ける。ユニテリアンのチャンニングに於ける。總じて新教のルーテルに於ける。悉く皆然りと云はざるを得ず。カルビンは如何なる人ぞ、ノックスは如何なる人ぞ、ルーテルい如何なる人ぞ、其質其擧、各々異なれり。然りと雖ども。其の彼等が時の惡弊を觀、僞善を觀、迷信を觀て、慷慨憤怒、措く能はず。死を以て此が改革救助に從事するに至りたる心の一線、即ち彼等が基督の心を抱いて、奮出したるゆ

んの途に至りては、余れその秋毫も異あるところあるを見ず。然るを若夫れ末流に及んで內に此心を抱懷せず、而して空しく遺傳の神學を主張し、宗規を主張し、傳道を主張し、而かも宗徒の卑俗的たるに至るに於ては、余輩は既に其カルビン、ノックス、ルーテルの弟子にあらざるを知るあり。かのルーテルが慨然ウオルムスの大會に臨み「余れ此に立てり、余れは此より外何事をも爲す能はず、神よ余を助け玉へアーメン」と叫びたる精神を觀よ。ノックスが憂國の情に堪ゑず、余れにスコットランドを與へよ、然らざれば、余に死を與へよ」と、泣禱したる誠意を觀よ。カルビンセチベに入る、乃ち宗教が政治の下に蹂躪せらるゝを見て、悲憤に堪ゑず、たとひ如何

なる慘苦に會ふとも、毅然として自ら任じ、予れは宗教の自由を見ざれば輙ち瞑する能はずと、激湍を支へて昂立した る堅志を觀るべし。フオックスは何人ぞ。余輩は敢て「クエーカル」を讃せず。然れども其宗祖フオックスが十二歳のとき、既に聖人たらんとを心に期し、爾來長ずるに及んでは、青年の墮落を悲しみ、老人の頑愚を憂へ、宗教界の腐敗を嘆き、而て遂に單純にして而も心靈的專一なる一新宗派を豪立したる其心は即基督の心にして、余輩が欽慕措く能わざる所のもの也。又かのチヤンニングを見よ、今やユニテリアンの徒い偏に寒冷的の議論を主張し、其或は救世の大任を口に唱ふるなきにあらずと雖ども、多くは才子的、學者的の徒を以て滿

つ、然れども其宗祖チヤンニングは決して寒冷的人物にてはあらざりし。彼は下等社會の民を觀て、如何も憫然に堪えがたく、屢〻靈魂の貴重を說き、たとひ如何なる下民たりとも、皆同じく神子の資格あるものと宣べ、終に人類を墮落物と云へる、神學者を目して、是れ人類の敵なり、進歩の敵なりとまで揚言し、而して一生其身を下等社會の說教者と稱へられしめ、而かも恰然として周圍の褒貶に其意を動かす と更になかりし。嗚呼此心あり、此心あり

余輩は神學を輕んずるものに非ず、然れども此心を重しとするものなり、宗規祭典を蔑ろにするものに非ず、然れども此心を入れて始めて之を尊しとするものなり。苟も此心に

して微ちんか、何如はど斬新なる說あるとも、如何はど奇警なる論なるとも、余輩に於ては天文地理等に於ける新論奇說を聽くと一般のみ、其說眞理なるか、余輩則ち之を取らん、我識及ばざりしか、余輩則ち之に從はん、然りと雖ども我が世に對し神に對する基督の心は昨日も今日もいつも之が爲めに變ずることはなきなり。そは神學は(屢々繰返して云ふが如く)智識に屬し學問に屬す、而して智識學問は人に由て違ひ、世に由て違ひ、常に進歩變遷するものあればなり。然れども彼の所謂る基督の心や(又屢々繰り返すが如く)蠻野に在るも、開明に在るも、愚人に存するも、智人に存するも、曾て異同あることなく、蠻人德に感ず、而して開明の人固より

感ず、愚人もその子を愛す、而して智人も亦た然り、赤子井端に臨む、而して人皆走て之を扶く、毒蛇青蛙を呑む、而して人皆行て其蛇を擊つ。蛇に宿怨のあるにあらず、而かも猶ほ彼れを擊て此れを救ふ。是れ所謂る普通の性情也、而して此性や、此情や、曾て萬世を經て變ずることなく、萬人に通じて違ふことなし。嗟呼此心なり、此心なり。此心をして熾おらしめ、此心をして活動せしめ、此心をして人生百般の上に勢力を存たしめんと欲す、是れ即ち基督が此世に降り玉ひしゆゑんにあらずや、否、基督自己は、即ち此心の大塊に非ずや。苟も基督の心を以て心とすと云ふもの、即ち此處を學ばざるべからず。余輩はルーテル、カルビン、ノッ

クス、ウエスレー、フオックス、チヤンニング、オーガスチン等の神學を輕んせず、寧ろ其心即ち其人物を重んぜんと欲す、彼等の神學は互に違へり、而かも誤謬尠からざるを見る、否、たとひポーロ、ペテロと云へども、其神學の上に於ては、互に違ひ、又互に誤謬ありしを見る。ポーロは此世の終末近く、眼前に迫れりと誤認し、ペテロは割禮について尚は惑あき能はざりし。ヤコブとヨハネとは天國を誤解し、凡ての弟子は曾て皆基督の十字架の意味を知らざりし。然りと雖ども、其の彼等が皆一樣に神を愛し、基督を愛し、人を愛し、世を愛し、人の家に入りては安然を求ひ(路加十章六節)、己が室に歸りては聖靈を祈り、(馬太傳六章六節)、貧者に遇ては福音を宣べ、渴

者に遇ふて水を汲み、病を癒し、鬼を逐ひ、悲しむものを慰め、苦しむものを救ひ、暴を退け順をいたはり、正を踏んで立ち、義を見て奮ひ、而して悉く皆基督の心を以て心となしたる上に於ては、余輩は更に異あるところあるをみざるなり、而して悉く之を眞正基督の弟子なりと思ふ。然則其人物にして俗ならんか、此心なきか。其言ふところ、行ふところにして更に世道人心に益なからんか、如何に破天荒の說を吐くとも鳴る銅や響く鈸の如きのみ(コリン、ト前書十三章一節)

基督の心と誠正の英雄

かく論じ去り、論じ來りて、而して熟々勸ふれば、かの世に所謂る眞誠の豪傑たるものも、詮じ來れば、又同じく基督の心

の化成物に非ずや。彼等の大なるところ、何處に在る、智か、曰く愚人は豪傑に非ず、故に智また其の要素の一たらん。勇か曰く、憶病者は英雄にあらず、故に勇また其の要素の一たらん。然りと雖ども、勇や、智や、眞正の豪傑を形造ること能はざるあり。然則學者か、老練家か、曰く否、學者は物知りのみ、老練家は作工人のみ、何ぞ眞正の英雄たらんや。然則如何。曰く、眞正の豪傑には智勇學練、何れも應分の場處を有す、然と雖ども彼等が智者に非ず、勇者に非ず、學者に非ず、事務家にも非ずして、而も尚能く眞正の豪傑たるを失はざるゆゑんのものは、即彼等の内には、智者も勇者も學者も事務家も、決して企て及ぶ能はざる天眞自然の愛心を有し、至誠を有し、盛德を

有し、而して人を憐れみ、國を憂ふるの情にたゑず、利をも忘れ名をも忘れ、而して遂には己が身をも忘るゝに至る、至高至大、至美、至善の眞性、即ち基督の心を備ふが故にあらざるなきを得んや。至て不穩當なる譬喩あらんも、試みに彼の三國史を見よ、勇は張飛に及ぶものあく、智は孔明に駕するものあし、然れども遂に彼等が劉備を仰で帝王となし、而かも謹んで之に服從したるゆゑんのものは抑々何ぞ。曰く劉備に宿る基督の心、即ち茲に到らしめたるなり。劉備一び駕を孔明に枉ぐ。孔明隱れて出でず、劉備失意す、然れども憂國の情如何にも禁ずる能はざるものあり、乃ち屈して枉駕を二、びす、臥龍なは起きず、於此乎失望に交ゆるに或は不快の念

を以てしたるならん。然れども顧みて惟んみれば、孔明の非禮や尚ほ忍ぶべし、奸惡の跋扈や忍ぶべからず、乃ち三び辭を卑ふしてゆき、而して訴ふるに治國平天下を欲するの衷情を以てし、併せて又た孔明にあらずんば、以て此の大任を輔くるものなき信意を述ぶ。於此乎、孔明遂に身を以て彼れにゆるせり、思ふに玄德が愛民憂國の情の中には、孔明の非禮を顧みるに暇あらざりし、己が貴尊を傷くることを忘れたりし。人或は曰はん、玄德も亦た是れ一種の奸雄たらんと。余は知らず。然れども たとひ奸雄たるにもせよ、臥龍が感奮して起きあがり遂に其身を殺して、而して悔ひざりしゆゑんの中にい、焉ぞ基督の心のあらずと云はんや。世に似非豪

傑あるものあり、時としては一世を籠絡す。然れども退いて其陳跡を窺ふれば、之に心服、若しくは忠事したるものは寔に罕あり、苟も人心あらんものい、疾くに其心事を洞察し、而して行て之に隨ふ、蓋し其の隨ふや、己が名利を思ふて隨ふあり、己が好事心に隨ふなり、若しくは時の習俗により、止むを得ずして隨ふあり、決して其被むれる假面に欺かれ、若しくは其裝へる紫衣玉冠に眩惑せられ、而して誠意以て服從するものにはあらざるなり。略して之を云はゝ、凡て愛なきもの、誠なきもの義なきもの、恩あきもの、涙眼なきもの、慈腸なきものは、決して人をして心服せしむること能はざるものなり。凡そ人の爲めに死すること能はざるものは人も亦

たその爲めに死することを好まず。凡そ人の爲めに死するものは人も亦喜んでその爲めに死す。是れ人類普通の情性あり。而して是れ古今無數の生靈が基督の爲めに其身を惜まざるゆゑんに非ずや。ナポレオン嘗て嘆じて曰く、ア、我が爲めに死するものは生時數十萬の兵あらん、然れども死後我が爲めに死するものそれ幾人かある、然れども基督の爲めに死するものは萬世に至るまで絶ゆることなしと。基督も亦た自ら曰く、余れ若し上げられなば萬民を率ひて、我に來らせんと、(ヨハネ傳十二章三十二節)。實に然り、苟も基督の鴻恩にあづかるもの、誰か基督の爲めに其死を惜まんや、苟も基督の心を知るところのもの誰か其下に來らざらん

や、而して眞正の豪傑たるもの又々此の如くあらざるべからず

世人はカルバルヂーを豪傑と云ふ、而して之を欽仰す。然れども其豪傑たるところ何處に在る。智か、勇か、學か、力か。曰く否、其の彼が一日羅馬の古址を眺めて、悵然として去る能わず、或は往時の盛都を懷ひ、或は目下の亡狀を悲み、慷慨の涙堰きあへず、乃ち奮然起ち上りたるところ、是れ即ち彼が豪傑たるところにあらずや、彼が勇を鼓したる源泉に非ずや、彼が智を振ひたる根本にあらずや、彼れが其身を犧牲にして奮騰したる、噴火の山の腹にあらずや

世人動もすれば華盛頓を稱す。然れども其華盛頓が華盛頓

たるところのものは、偏へに彼が胸中に基督の心の燃えしがゆゑのみ、彼れいまだ青年たりしとき、一友と共に河畔を歩す、忽ち婦人の叫ぶ聲あり、又騒々しき音したり、因て何事ぞと、急ぎ馳せ行て之を觀れば、一孩兒の岸下に落ちて、溺れたるより、其の母之を見て狂喚絶叫、將に激湍に飛び入らんとするを家の主人幷に隣人等が之を擁して、騒ぐにてありける。於此乎、華盛頓は之を見聞して大に驚き其子何處ぞと、刮目翹踵、廣く水上を見渡たせば、遥か下流の方に當りて、隱顯出沒流れける、母親も之を見たり、其夫も之を見たり、又隣人も之を見たり、而して孰れも叫喚す、然れども誰あつて之を救はんとするものなし。蓋し急流矢よりも駛きが上、下流

に大瀑あり、竟に及ぶべからざるを知ればなり。然りと雖も華盛頓に宿る基督の心は毫も之を見て危疑することなく、直に衣冠を脱ぐよとみゐしが忽ち河中へ跳り入りたり。岸上に在るものは之を見て、おはや〳〵と叫ぶが中に、華盛頓はかねて水練に長じたればや、みる〳〵激湍を亂して行き、殆ど溺子に近寄れり、然れども事早や少く遲れたれば、拾も大瀑の上に來れり。此に於てか傍觀者は却て華盛頓の身を危ぶみ、危し返へせと喚びたれども、華盛頓は更に顧みる模様なく、ますます泳ぎ近づきて、漸く溺子を捉へしが、激湍益〻激に、急流益〻急に、あはやと叫ぶ聲諸共、大瀑の下に轉落しゆきたり、此に於てか衆皆驚き、急ぎ馳せ行て之を見ば、華

盛頓は幸に微傷をも負はず、孩子を抱きつゝ大瀑の中より上り來れり、因りて孩子の父母を始め、寄り合ふ隣人に至るまで、喜び泣て感謝を述べ、又その德を頌せざるはなく、かくて其子を介抱せしに輒ち蘇生したりしが、其時其母は不覺不知、華盛頓の手を執り、オ、君よ天は必ず後日君に大任を授け給ふの、日あるべしと瞳を定めて告げしと云ふ。嗟乎、〳〵讀者は果して如何なる感あるや、それ此心や即ち彼れが後日氷雪を冒して使節を奉じたる心たるなり、雨矢丸霰を懼れもせず、猛然勇進したる心たるなり、而して遂に萬古偉大の獨立國を創設したる心たるなり

世人或は誤て思ふ、凡そ英雄豪傑たるものゝ偏に力量の勝

れたるに在りと、而して其人物の正邪淑慝を問はず、無暗に之を稱讃す。甚しい哉、此の謬見の世を害するや。若夫れ邪雄奸傑あらんには何ぞ之を讃譽するを需ん、大蛇の如きのみ、巨狼の如きのみ、四面より之を獵して可なり、何の假借することかは、茲に一雄あり、大臣の位につく、彼れ事を取る敏あり、人を御する巧あり、時を知る聰なり、身を處す慧なり、此を以て人皆之を英傑と稱す。然れども窃かに一方より之を觀れば、其心事の不淨なる、其擧動の狡猾なる、國民を思ふよりも名勢を思ひ、職務を重んずるよりも、政畧を重んじ、西に飜へり、東に靡き、南に廻り、北に馳せ、而して私願をのみ、是れ謀る。此者果して力量あるか、力量あるか、力量あるはど、益々國

家の不幸たるのみ。茲に一傑あり、權勢を握る、而して其常人に優るところは、曰く勇猛、曰く果斷、曰く磊落、曰く豪膽。而して一世を睥睨す。然れども其心意や善美ならず、其言語や篤實ならず、曾て國の廢德を憂へず、曾て民の疾苦を思はず、徒に劍を按じて以て下に對し、只だその地位を失いざらんことを是れ勉む、此者果して英雄か、其の彼等が英雄たるは適々國家の爲めに吊すべきのみ、若し夫れ推されて以て議員に擧げられ、民黨を唱へて議場に出で、而して更に同胞を思はず、空しく嫉妬に意を用ひ、徒らに鬪爭に日を費やし、畢竟するところ、己が功利の爲めにのみ、奔走して、而して終に多年の衆望を泡沫に歸せしめたるもの、彼れ果して眞の英傑

あるか、余輩は其英傑の益々出でざらんことを祈るなり。近時板垣退助氏嘆じて曰く、嗟呼議員が民の疾苦を代表せずわが小名譽に汲々とし、多年の辛苦を空泡に歸せしめたることを思へば、轉た斷腸の想にたえざるなり、是れ蓋し人に誠意の乏しくして輕薄風を爲したるに由らずんばあらずと(氏の地方巡回演說中にみゆ)何ぞ其聲の悲慘ある、嗟呼噫、嘻人として苟も基督の心あからんか、又論ずるに足らざるあり

眞正の英雄豪傑を見るべし、惡く皆基督の心の人にあらざるはなし。西鄕南洲翁は如何なる人ぞ、彼れ奮起して而して維新の功興り、彼れ一擧して數萬の子弟乃ち死す、蓋し彼れ

が至愛に因る、彼れ一日其弟が元服の祝宴に會す、而して泣く友人其故を問ふ、答て曰くア、余が母や余が此弟を愛せしこと頗る深し、今にして在らしめなば、其喜ばんと如何斗か、而して顧みれば既に亡し、余之を思ふて、乃ち泣くと、其孝心や、誠に此の如きものありし、然而して此孝心即ち民を愛せし心あり、此民を愛せし心、即ち國を愛ひし心なり、此國を愛ひし心、即ち月照と海に投せし心なり、此月照と海に投せし心、即ち戰場に勇を振ひし心あり、戰場に勇を振ひし心、即ち廟堂に豪論を張り、而して終に城山の白骨となりたる心にあらずや。其識足らざるところあり、其策拙なるところあり。然れども其憂愛の衷心に至りては、則ち人と國との爲め

に、甘んじて犧牲となり得る、天眞爛熳の美性、紛として それ觀るべきものあるに非ずや。而して是れ所謂る基督の心たるなり。阿ブラハム倫古龍嘗て急事あり、いろゞ馳せて某處を過ぐ、偶々孤豚の大溝に轉び、半身泥に埋沒しあがら、天を仰て叫喚するを見る、乃ち行て之を援けんと欲す、然れども溝廣く且つ深く、徒手如何ともする能はず、於此乎忸怩として去り、行こと二英里す、然れども惻怛の心終に忍び難く、乃ち踵を還して馳せ歸り、傍家に請ふて木板を得、之を投じて泥裡に降り、遂に窮豚を援ひ擧げ、新衣を汚泥に染めながら、欣然として去りしと云ふ。ア、此孤豚をすら見捨て去ること能はざるの心、即ち奴隷を憫れみたるの心あり、此奴隷を

憫れみたるの心、即ち大統領に登りたる心あり、此大統領に登りたる心、即ち暗殺を辭せざりし心あり、此暗殺を辭せざりし心、即ち愛熱血の心たるなり、彼豈巧利の爲めにせんや。實に基督の心、即ち彼をして遂に爰に至らしめたるなり。余輩は此に多例を重ぬるに暇あらず。ウエスレーが老媼の窮を憫れみ、己れを忘れて而して彼を援ひたるの心、即ち是れ彼れが宗教改革者たりし心に非ずや、ゴルドンが憫然ある一婦を觀て、而して寶玉を忘れたるの心、即ち又是れ彼れが義骨を撫してカルツーに入りたる心にあらずや。楠公が帝王の尊嚴に接し、感泣措く能ず、乃ち拜辭して歸りたるの心、重盛が父の暴惡を悲しみ、遂に死を以て其父の爲めに

聽りたるの心。此忠、此孝。是れ即ち彼等が肝膽を碎きたる心にあらずや、彼等豈名を思はんや。彼等豈利を想はんや。胸間耿々たる一片の至誠、即ち所謂る基督の心、全く彼等を支配せしのみ。然則我所謂る眞正の英雄豪傑たるところのものは、當に基督の心を有するものたらざるべからざるや明かなり。若夫れ此心微らんか、勇い暴となる、項羽是れなり、智は猾となる、孟德是れなり、權勢は禍となる清盛是れなり、然而して余輩は今言聲を張り揚げて云はん。若夫れ此心あから、んか、議院も政府も賄路の市たらん、嫉妬の府たらん、臭豚の小屋たらん、狐狸の巣たらん、虎狼の野たらん、俗物姦邪利己一遍の住家たらん。然而て我所謂る基督の心は、乃ち悄と

して其跡を收め、民益〻若しみ、國益〻危く、遂に救ふべからざるに至らん哉、嗚呼、余輩が基督を拜し、基督を愛し、益〻基督に化せられんことを是れ祈る。豈之を國家の爲めに徒爾ありと云ふんや。

基督の心と信者の覺悟

かく反覆論じ來れば、讀者は既に、余輩等の解し居る基督の心とは如何、又基督信者として余輩等の懷くところの心魂如何は、疾くに了得せられたるべしと信ず、

然るに之を疑ふものあり、乃ち余輩を難じて曰く、汝が云ふところ、或は然らん、又其精神感ずるに餘りあるもの〻如し、然りと雖ども、奈何にせん、事實と背馳するものあるに非

ずや。我れかの所謂る一般の宣教師幷に普通の牧師傳道士等を見るに、宗派の競爭にゝ頗る勞す、異說者を排斥すること頗る嚴なり、異宗派を魔道視すること頗る酷なり、然りと雖ども、我れ熟〻彼等を觀るに、汝の所謂る基督の心、即國を憂ひ人を愛し、罪惡者の爲めに涙を流し、悲哀者の爲めに腸を斷ち、其不忍の情の激するに於ては、たとひ肉を裂き血を流すとも、尙且つ悔ひざる義人の腸若しくは汝が所謂る眞正英雄の心膽あるもの〻多からざるは、抑々何ぞや。師たるものにして此の如し、之に從ふ信徒の輩、また推して知るべきあり。特に某記者の云ふところによれば、目下基督教主義の學校にて養成せらる〻學生即ち青年輩等ゝ、多くは心理

的の老翁のみ、山寺坊主然たる薄志弱行の徒多しとあす、是れ抑々何の理ぞ。嗟呼、汝の口よく辨ず、若かも此實況を奈何ん、汝の筆能く舞ふ、若かも事實を掩ふこと難けん、呵々反覆の議論、竟に空中の層閣のみと。

ア、余輩は之に關して、敢て一言をも云はざらんと欲す、蓋し胸塞り涙流れて、而して言ふこと能はざるものあればなり。然りと雖ども知るものや知る。たとひエリヤは己れ一人ありと思ひしかども、バアルに跪かざるもの尚は三千人ありしにあらずや。たとひ歐米の宗教は全く義式のみと云ふものは、云へ、今尚其生命の衰へざるゆゑんのものは、彼れに義魂のあればなり。羅馬教腐れり、然れども、ルーテルは其羅

馬教徒の中より出でたり。パリサイ宗腐れり、然れども、ポーロは其パリサイ宗の中より出でたり、ウエスレーは何處より來る、サボナロラは何處より來る、ノックスは何處より來る、ハッスは何處より來る。是れ皆彼國宗教界より出でしにあらずや。コロンウエルの糊を投じて起ちたる、ワシントンの天を拜して戰ひたる、ヘンプデンの劍を拔て進みたる、ナイチンゲールの彈丸を冒して看病したる、フライの山川を超へて遊説したる、エリザベッの惡疫を忘れて病家に入りたる、其男たると、女たるとを問はず、其誠、其勇、其美、其愛、果してそれ何處より來たる。彼等は皆諸共に叫んで曰く、余は基督より之を得たりと。ポーロは信を說き、ペテロは望を說き、ヨ

ハヂは愛を説き、ヤコブは行を説き、孰れもヒューマニチーの道に其身を殺せり。ガラリヤの漁夫、パリサイの幕工、何が故にそれかくの如く神潔義勇の品格を具ふるに至りしか、彼等は曰く基督の愛余を勵ませりと。降て彼等の時代より其今日に至るまで「北の端なる氷の山、印度に有と云ふ珊瑚の島も、かのアフリカの照る日熱き、砂漠の原を厭ひもせで」道を傳へたる人傑を見よ。ヘンリー、セルテンのペルシヤに於ける、ザビエの我國に於ける、ハンチングトンのアフリカに於ける、エリオットの米土人に於る、チャンバレンの天竺に於ける、バットンの食人島に於ける。泰山を高しとせず、大海を廣しとせず、身を萬里の孤客となし、飄眇去て、死處を思はず、

水難、山難、人難、病難、を冒し侵して、而して終に枯骨となり、而かも感謝して終りたる、其壯、其豪、其意、其心、果してそれ何處より來る、彼等は曰く愛人の誠、我をして止むを得ざらしむるのみと。加之讀者よ試みに、基督教國の歴史を繙き、而して政治上、教育上、事業上なる志士仁人、即ち憂國、愛民の人豪を見るべし。蓋し其中基督教徒たらざるもの幾人かある。而して彼等は政署上、外形に宗教を裝ひたる、かの所謂僞善浮薄の士にはあらず(既に僞善浮薄といふ何ぞ志士たらん仁人たらん)誠に衷情以て神に祈り、丹精以て基督の心を行ひたるものにあらざるはあきなり。

然則、何ぞ基督教を指し、有名無實の宗教と云ふや、又その信

徒を口心不一致の俗物と云ふや。勿論イザヤエレミヤの子孫に「パリサイ」「サドカイ」の宗徒起り。ペテロの跡に羅馬教の腐敗生じ、ルーテルの後に蝸角的の神學者來り、ロヨラの仲間に謀反心の政略家出で、ウエスレー、カルビン、ノックス等の門下に俗物儀式的の信徒起らざるにあらずと雖ども、是れ豈基督教の眞相あらんや。蓋し之を知る、當に活眼を要す、皮相見者の窺ひ知りうるところにあらざるなり

然りと雖ども余輩は茲に謹で主に在る兄弟姉妹に一言す。

實に今日は警醒すべき時に非ずや、而して其警醒すべきは、外貌、宗式、歐米遺傳の教義にいあらで、實に基督の心の一點に在て存すと思ふ。往時或る牧師は大喝姉妹を警して曰く、

汝結髮を解て、束髮とせよ、是れ神の旨に叶はざるなり、汝かねを剝し、眉毛を殖よ否らずんば、汝神に向ふて、罪人たらんと、或る宣教師は又た熱心に或貧書生を警しめて曰く汝何ぞ股引を穿かざる、蠻野の裸脚、是れクリスチアンたる資格に叶はざる也、汝髮を梳れ、亂髮は神の好み玉はざる所なりと。以上の二件是れ實に余が實知するところあり。而して當時基督教界中一般の空氣は、實に此等の諸點に重力をれきつゝありしなり。或は曰く墓地に行て石碑を倒せ、是れ偶像宗の迷信によるものなればありと、或は曰く神佛の祭壇を毀ち悉く之を燒き拂へ、是れ眞神の嫉妬を惹き起すものなればなりと、或は曰く汝何ぞ信仰の燈を升の下に置とをや

する、何ぞ服紗に裏みて主より預かりし金を土中に藏むや、行て信仰を云ひ顯はせ、而して救魂の道に馳せよ、家業の衰へ、顏何かあらん、財産も身魂も悉く皆神のものたるを忘れたるか。曰く日曜日には祈禱と讀經と傳道の外は何事をもなす勿れ、新聞をも讀む勿れ、俗事汝の魂を汚さん、午睡をもなす勿れ、惡魔其の翼に乘じて入らん、一滴の酒をも飲む勿れ、汝必ず地獄に落ん、一烟の莨も喫ふ勿れ、汝必ず魔擒に會はん、此世は夢なり幻あり、只管天國を望みてゆけ、不信者の書物を讀む勿れ、之を讀む已に魔誘に陷りしなりと。云々。嘻、噫余輩は最早や此等を重ねざるべし、蓋し是れ日も足らざればなり。勿論此等の敎訓は幾分か皆眞理を有す。然りと雖ども

も唯り此等の外形のみに窮々とし、啾々となし、區々とし、戚々として、而して我が所謂る基督の心に至りては、寂として奬勵の聲をきかざりしゆえんのものは、抑〻何等の怪事ぞや

莫遮是れ皆一時の迷誤にすぎず、基督は世の終まで余等と常に在すなり、我等豈復活の望あしとせんや。而して今や其期近けり。見よ、生命を呼ぶところの勇士、正に壇上に登り來れり、空式を權威の坐より引き落せよとの聲、已に心あるものゝ口より喝び出でたり、歐米の遺傳を以て神の誡を輕んする習慣は、將に活鏗の後に瞠若し、我所謂る基督の心益〻光明を放たんとす。アヽ、是れ何等の快時ぞや。加之熟〻從來

の信徒を觀るに、彼等の中には如何樣にも、迷信多かりし、智識あき熱信多かりし、外形虛飾に陷りたるところありし、歐米の習慣を眞の基督教と誤解したるものありし、宣教師若くハ牧師の私見を神の御心と正直に誤認したるものありし、然而して信徒の人物は高尙に進まず、彼等の品性は純潔に化せず、而して我所謂る基督の心は、案外其衷に微弱あり しは、或は悲しき事實たるらん。然りと雖ども、彼等が嘗て悔改の涙を灑ぎたるを見るべし、豈彼等に至誠あからんや。彼等が嘗て堪へがたき迫害を受けながら、尙且つ十字架を負ふて基督に從ひし跡を見よ、豈彼等に精神なからんや。彼等は嘗て神の爲めに死を恐れざりし、豈義勇心あからんや。彼

等は嘗て人魂を救ふの道に猛進したるものあり、豈愛心なからんや。彼等は嘗て禁じ難き烟草を禁じ、止め難き酒を止め、多年耽けりし肉慾を擲ち、而して敎會に入り來れり、豈彼等に犧牲獻身の豪意なからんや。それ彼等の中に於ては、當初より僞善の徒なりしものもあらん。惡魔の蒔きし種子たりしものもあらん。然れども其大体より觀察を下せば、彼等は實に正直なるものありし。義に勇みしものなりし、道の爲めに其身を捧げしものなりし、其盲者の手引に會ひ、頑迷の說に從ふて、而して大に基督敎の神髓を見誤り、一蹉一跌遂に前述の如きものたるに至りしとはいへ。其本來を尋ね來れば實に美質粉々有爲の人種たるや明かあり。之をかの神

なく未來あく、たゝ己が口腹にのみ奉事する、世上一般の人に比べあば、豈同日の論ならんや。然則晋る勿れ、笑ふ勿れ、寧ろ彼等に智識を與へよ、眞路を示せよ、形骸と神髄と義式と心靈との輕重を知らしめよ、習慣と眞理と遺傳と天意と神學と生命との別を辨へしめよ、而して我所謂る神の心、即ち神が其獨子を賜ふほど世の人を愛し玉ひし其心。而して基督の心、即ち基督が十字架の苦をさへ厭はずして尚且つ斯民を救はんと欲し玉ふたる此心。是れ又た基督教の神髄なり。と云へる此の主要なる基督教の奥義の意味に達せしめ、而して大悟大觀以て眞人物たるの道を彼等に教へよ。則ち彼等は俄然として起き上り、昂然として世上を眺め、愁然

として愛腸を飜へし、慨然として義骨を振ひ、潸然として紅涙を流し、烈々乎として悲痛に堪へず、乃ち驟然猛然、基督の蹤を追ひゆきて、直にヒエーマニチーの軍に投ずるに至らん。而して是れ我が今日の基督教に向ひて、熱願措かざるところのものにして、而も此熱願や必ず恥辱を來らせざるを知る。(ロートマ書五章五節)否、余輩は今日何とおく其時の近く我國の上に來れることを頻りに感じて止まざるあり。蓋し目下我國の狀態、實に其時を呼べばなり

基督の心と我國の現狀

サレバ試みに今日基督耶蘇の心を以て我愛する日本國裏を觀察せよ、果して如何なる感想や起る。顧みれば浦賀の砲

聲、一たび我太平を乱したる以來、文物ゝ開け、人智は增し、國歩の進行、實に著るしく憲法も出で、議會も開け、文明の機具殆ど備はらざるはなきに至れり。然れども國民の疾苦は日々に益〻甚きを加ふるものあるに非ずや。慈眼を擧げて周圍を視よ。何ぞ憫然なるものそれ多きや。巡査の聲の怖ろしきより、幸に路傍に丐兒を見るは稀れありと雖ども、滿目の蒼民は殆ど丐兒に類するにあらずや

來れ、田舍に來れ。而して我言の誣ひざるを知り玉へ。余れ屢ゝ田舍にゆく、之を以て親しく田舍同胞の生況を知る。實に悲慘極るもの多し。彼れ膏汗を絞りて米田を耕く、然れども收納は多く豪農の藏に歸し、而して其身は粟麥だも食ふこ

と能はず、朝三暮四に其意を勞す、桑を採り蠶を養ひ、愴惶焉として、晝夜眠らず、漸やく茲に金絲を制す、然れども其身はこれを用ゆる能はず、一生襤褸に其身を纏ふ。或は南海に鹽を燒き、或は東山に草鞋を打ち、或は北陸に薪炭を擔ひ、或は西海に漁舟を漕ぐ。是れ我が多數同胞の生況あり。人或は詰て曰はん。汝張大の言を吐く勿れ、又悲慘がましく云ふ勿れ。彼等豈汝が云ふ如き、悲況ならんや。又何ぞ汝が想像する如き痛苦あらんや。彼等には彼等應分の快樂あり、彼等を以て、汝に比し、而して悲慘の同情を表す、また誤らずやと。曰く或は然らん、而して是れ余が幸に天に感謝しうるところあり。然りと雖ども。人よ、彼等の呻吟く聲は聞えざるか。骨立の瘦

顔は見へざるか、牛馬と軛を共にし、犬猫と食を爭ひ、而して、蠅散蟻集する有樣は、汝の耳目には達せざるか、汝の憐情を惹く能はざるか。薄暮九段坂上の景、余輩前に寫し出せり。然則遠く田舍を尋ぬるに及ばず、近く聳轂の下に在るあり。汝の目には見ゑざるか、汝の耳には聞ゑざるか。一言以て之を括せば、我愛する邦國は其人口の增殖につれ、益々貧困に陷りつゝあるなり。其都鄙と老幼とを論ぜず。多數の同胞は益々生計に苦しみつゝあるあり。親しく內情を觀察し來れば、實に悲慘極るもの多きなり。而て此の人民同胞は、其の實、國家の主人にあらずや、豪農の藏は、即ち彼等の膏汗より成る、堂々たる官宅は即ち彼等の血涙より成る、彼等の瘦せたる

は即ち國家の瘦せたるあり、彼等の倒る、即ち國家の倒るゝあり。苟も基督の心あるもの、誰か之を見て憂愛悲憐の情に堪ゑざらんや。

然則如何にして此國民を救ふべき。曰く政治を以て、宗教を以て殖產を以て、文學を以て、敎育を以て、則之を救はざるべからず。然りと雖ども今日の狀態より觀じ來れば、甚だ覺束あきものゝ如し。何となれば此等諸機官の間に於て、基督の心乏しければなり。朝に在る政治家。野に在る政治家。果して眞に基督の心を有するや、否や。即ち眞に人を愛し國を愛ひ、名を忘れ、利を忘れ、赤心至誠の衷情より國家の爲めに盡さんと欲するの心意あるや、否や。ワシントンの心あるや否や。

リンコルンの心あるや否や。隆盛の心あるもの、今在るや否や。蓋し之れあらん。然れども何ぞ今日まで猜疑權略のみ跋扈して、而して衆望を繫ぐべき眞雄英傑の顯はれざるぞや。勅語に曰く汝等君に忠に親の孝に、博く衆を愛し、勇義公に奉せよと云々。實に是れ千古の格言、而して添く之を我愛する皇上より受く、吾人い精忠に之を奉体し、夙夜其意に叶ふの良民たらんことをのみ是れ祈る。然るを何ぞや、之を禮拜せしめし或るもの、言に曰く。是れ政略なりと。何ぞ其語の不敬侮慢なる。否よしや其語をして訛傳ならしむるにもせよ、苟も基督の心を以て之を服膺することを期せずんば、畏れ多くも折角の勅語をして終に水泡に歸せしむるに至ら

んか。彼等は謂へらく、勅語を禮拜せしむれば、輒ち以て忠孝勇義の人たらんと。何ぞ其考の淺墓なる。若夫れ勅語を禮拜せしめて以て忠孝勇義の人たるを得ば、德育誠に易々たるのみ、否かゝる淺薄なる方便を以て我德育界を領せんとするが故に、教師は僞善に陷り、生徒は浮激に馳せ、而して益々救ふべからざるに至らんとす。ペスタロヂーは教育家の泰斗なり。嘗て校舍に入らんとせしとき、學生の塵埃を揚げて墨煙の如くなるあるに會ふ、然れども厭はず入らんとす。傍に在りし一婦人、彼を擁して止めて曰く、塵埃甚し、暫く待ち給はずやと。ペスタロヂー答へて曰く、否々是學生の揚ぐるものあり、塵埃も亦た香しき哉と。さる代りに學生も亦た之

に報ひて言て曰く。若し夫れペ師が爪を以て余を爬かば、余れは其爪に接吻すべしと。何ぞ其愛の相密なる、何ぞ其誠の相結べる。夫れ如此にして而して始て眞正の敎育家たるべく、此の如くにして始めて學生を薫陶すべき也。然るに此心を先とせず、徒に外面上の義文を先にし、此至誠心を養はず、而して徒に説語を弄す。我輩い勅語百遍の禮拜若しくは講釋家的無腸の修身談、畢に徒勞に屬せんことを恐る。然則、今日此基督の心を有る敎育家、果してそれ何處にや在る。

嗟乎此心なり、此心あり、余輩は確信す、若夫れ此心にして衰へんか、文學は猥陋、纖弱、工飾、浮激、徒に阿諛煽動の具たらんのみ。若夫此心にして衰へんか、宗敎は遂に死物たらん。空式

たらん、枯骨たらん。若夫れ此心にして微らんか、殖産も工業も遂に大功を遂げざるべし。よしや、一時の成功を見るとも、徒らに奸商をして國の財寶を私せしむるに過ぎず。豪農をして益〻下民を苦ましむるのみ。彼の文明國を見よ、ろの敎育にあれ、傳道にあれ、貧院にあれ、病院にあれ、苟も慈善に屬する世界の運動い、多くは皆豪商豪農の義捐に由るなり。彼等は何が爲めに、義捐する。蓋し基督の心ろの内に在ればなり。少くとも基督の心が彼等の社會に生くればなり。然而して今や顧みて我國を思へば、轉た慨然にたへざるものある也。

然則如何にせんとす、曰く吾人は須からく此基督の心をし

て、政治界にも、宗教界にも、商農界にも、教育界にも文學界にも、活潑々の生氣あらしめんと欲するあり。之を爲す如何、曰く演説に説教に、文筆に、實行に、其他百般の法方を以て之を日本社會に吹き入れんと欲するなり。然りと雖ども人心や化し難し、たとひ至誠神を動かすとも、事成らずんば則如何一曰く、たとひ日本腐れたりとも、豈更に憂愛の士なからんや。吾人は同志同心者と相謀り、茲に一大團結体を起さんことを期す。彼の舊人や已に或は彫るべからざらん、然れども天眞勇義の青年、續々將に出でんとす、吾人豈それ望なからんや。然則、汝同心同志者と結び、將に以て如何にせんとす。曰く我黨をして政治界を取らしむるに在るなり。宗教界を取ら

しむるに在るあり宗教界を取らしむるに在るなり。農商界を取らしむるに在るなり。我黨をして彼等を感化せしむるに在るなり、而して彼等もしそれ感化せられずんば、乃ち我黨をして自ら彼等に代はらしめんと欲するに在るなり。然則汝代て以て如何にせんとす。曰く誠忠我に在り。愛憐我に在り。我黨は唯だ愛人憂國の至情を發露せんのみ。勿論たい此心のみにては、無智の擧動に出ることもあらん、無謀の策を爲すこともあらん。此故に我黨は百般の學術哲理に達することを勉むべし、又其社會自然の理法に從ふことを忘れざるべし。然れども此心にして已に在矣。我黨の智、學、計、及び萬般の事業は悉く皆社會を益する具たるべし、渴者の飲と

なり、餓者の食とあり、疾苦を慰むる口とあり、病者を見舞ふ足とあり、死者を甦す療手とあり、而して國家を萬世に救ふの活力たるべし。然則其經綸や聞くことを得べきか。曰く愚や何ぞ當らん、只だ神に由つて近く我がモーゼの來るを待つのみ。よしや愚見あるにもせよ、此書は只だ今日の宗教界を眺め、國家を眺め、而して一片の微衷禁ずること能はざるところより、乃ち基督の心の如何を說き、內、吾人信者をして互に警醒奮起するところあらしめ、外、世人をして基督教の神髓并に其の活力の來歷を知らしめ以て大に今日に盡すところあらんと欲したるに出るのみ、若夫れ此心に入るの途、并に此心が運動法等に關しては請ふ不日鄙見を述ん。

ア、神よ冀くは汝が獨子を世に賜ひし其心根を與へ給へよ、基督が汝を愛し人を愛し而して十字架につき玉ひし其心腸を與へ玉へよ、汝は之を基督に與へ、孔子に與へ、ソクラテスに與へ、義士に與へ、仁人に與へ、愛國者に與へ、而して之を眞正の英雄豪傑に與へ玉へり。冀くは吾人にも之を與へ玉へよ。今や我民は泣き、我國は瘦せ、邪曲い行はれ、名利は彌こり、僞善は時めき、頑愚は狂ひ、將に不測の災禍來らんとす。願くは我邦家并に同胞を憐れみ玉へよ。諸の宗教は腐り諸の德教は衰へ、汝が基督に由て建て玉ひし生命の教も將に死骨とならんとす。ア、神よ、我等の目を明け、我等の耳を開き、而して汝が聖氣を吹き入れ玉

へよ、即ち余等をして基督の心の人とあし、而して今此時に於て大に警醒奮起するところあらしめ給へよ。今此時に於て大に盡すところあらしめ玉へよ。アーメン

基督の心終

明治廿四年六月十一日印刷
明治廿四年六月十八日出版

定價金拾貳錢

著者 松村介石 東京市麻布區仲ノ町貳拾番地
發行者 福永文之助 東京市京橋區出雲町壹番地
印刷者 島田用定 東京市京橋區湯山町六七番地
發賣 警醒社書店 東京市京橋區出雲町壹番地
賣捌 福音社 大坂市西區土佐堀三丁目三十八番屋敷

版權所有 登録

松村介石君著　勝伯題字　看雨道人序

○日本青年精神的教育　立志之礎（再版）

定價三十錢

淑慝賢愚ノ分ル貴賤榮辱ノ差ヲ處皆青年ニ在リ。楊子ノ泣路、墨子ノ悲絲、今尚ホ同感ニ堪ヘザルナリ。看ヨ方今我邦社會ノ景狀ハ如何ヤ、才子的、苟偸的、營利的、利己的、瞞着的、隱險的、偏數的、雷同的、卑近的、小成的弊風ニ傾クニ非ズヤ。可懼、可惜青年子弟ヲ誤ルモノ實ニ斯時ヨリ甚シキハナシ。著者頗ル此ニ慨スルアリ、故ニ歐米諸大家ガ其國青年精神的教育ノタメニ著ハシタル諸書十餘種ヲ鑑シ、之ヲ今日本邦青年ノ狀態ニ質シ、憤然筆ヲ操チ躍出シ大聲疾呼危險失敗ノ地ヲ警シメ、成功立名ノ缺ヲ說キ青年ヲシテ浮薄鄙劣ノ流俗ニ墮チズ、公明至誠ノ氣象ヲ養ヒ、精神的正確的卓犖高尚的ノ人物タラシメンコトヲ欲シテ止マズ、是レ敢テ此著アル所以ナリ、若夫レ其論述スル所チ知ラント欲セバ、書中、青年旅ノ首途、日本社會ト日本青年、現時日本青年ノ危險、獨立、決意、精神、膽力、進路ノ方向、德義ト得喪、負債ト獨立、客奴ト義俠、師友ノ感化、萬有ト書籍ノ感化等、其他目下日本青年ニ適切重要ナル數種ノ問題ニ就テ之ヲ觀ヨ、成敗ノ理、禍福ノ道、自ラ炳然明證アラン

立志之礎著者　松村介石先生著

○アプラハム倫古龍（再版）

定價廿五錢

目次○緒論○幼少の時代○青年の時代○其容貌○其智辯○其德行○其宗教○政治の時代（上）○代言の時代（下）○大統領の時代○其周圍と時勢○結論

夫れ倫氏い如何なる人ぞ、曰く眇たる一貧子より其身を興し、鳳翼龍變、遂に登て大

統領となり、德光を八表に振耀し、偉業を萬世に樹立し、吾人をして今猶欽仰措を能はざらしむるものなり

其爲人たる如何、曰く、至誠一貫、光明正大、欣介脫俗、敏活奇警、愛腸慈眼、堅志深思、度量宏濶、精神膽涵、即眞人物たる師標也、然則阿プラハム倫古龍は如何にして此等の品性を修養し得たるか、其訣如何、其途如何曰く是れ即ち此傳記に詳なるところなり、左れば今日我國に在て兀々苦學する青年諸君よ來れ、來りて今此傳を見よ、同國の情に激せられ、勇氣必す百倍せん、其志望や卑近、其擧動や孑々、俗を追ひ世に漂ふ、朋友よ、來れ、來りて今此傳を見よ、曉然醒悟、悔悛の涙堰さあへず、進て高達を期する學俗陋、正氣衰耗の我國を覩て、頓頭愁眉、至誠を推して立つ志士よ、來れ、來りて今此傳記を見よ、奮然蹶起、裝を整て直に倫氏の跡を追はんと欲する情念を振起して止まざるに至らん

基督教文學第一集　基督教及佛教

定價金二拾錢

右は曾て本社に於て蒐集したる內外諸大家の論文中永く存すべきものにて基督教と佛教に關したるものを摘集して一書となしたるもの、一卷を手にして基督教佛教の優劣眞僞を判すべく、又現今日本基督教文學の如何なるやを見るに足るべし

卷中の目錄下の如し、第一佛道の基礎（高橋五郎）第二佛道及基督教（井深梶之助）第三阿彌陀の說（ゴルドン）第四再論佛道（高橋五郎）第五我國に於て神道佛道の後狀如何を論ず（平岩愃保）第六論佛教道德（高橋五郎）第七佛教賴むに足らず（ゴルドン）第八世界佛教者の統計（小崎弘道）第九佛教を學ばる、人々に告ぐ（高橋五郎）第十愛を論ずる諸說を比較して耶佛二教の相違を明かにす（高橋五郎）第十一佛教哲學一斑

（高橋五郎）第十二亞細亞の光（井深梶之助）第十三近時佛教論（植村正久）第十四耶佛優劣私考（高橋五郎）

基督教文學第二集　基督教及哲學

定價金廿五錢

●目次○宗教論（植村正久）○學則論（森田久萬人）○基督教は事實に基けるを論ず（小崎弘道）○進化論と有神論の關係（浮田和民）○宗教的眞理の性質（小崎弘道）○人生の目的（島田三郎）○果して神に事ふべき乎（植村正久）○基督教の要領（小崎弘道）○有神哲學（小崎弘道）○凡神教を論ず（浮田和民）○方今思想界の要務（大西祝）○宗教の目的（井上哲次郎）○人性は善乎惡乎（吉田作彌）○哲學の目的及範圍（森田久萬人）○教育哲學原理（和田垣謙三）

基督教文學第三集　基督教及社會

定價金壹八錢

●目次○基督教と國民主義（小崎弘道）○青年論（和田垣謙三）○革命的の宗教（横井時雄）○適用的時代批評（田口卯吉）○英國に於ける基督教の勢力（浮田和民）○第一世紀の傳道（田坪謙三）○我國の基督教に於る新傾向（大西祝）○米國理財學の現況（小野英次郎）○日本將來の基督教（横井時雄）○我國現時の有樣に就き（小池靖一）○己を知り彼を知るは處世の要務（松山高吉）○聆齋和田垣謙三氏（植村正久）

上等製本三十五錢
並等製本三十錢

再版　眞理一斑

本書は植村正久君が多年勉學の上著述せられしものにして其議論の正確なる文章の

秀逸なる我國の宗教書中稀れに見る所なり今其目次を左に掲ぐれば江湖の諸彦其書の一斑を知り玉へ

第一章宗教を總說す其一○第三章宗教を講究するに必要ある精神を論ず○第四章神の存在を論ず其一○第五章神の存在を論ず其二○第六章神と人との關係を論じ併せて祈禱の理を說く○第七章人の靈性無究なるを論ず○第八章耶蘇基督を論ず○第九章宗教學術の關係を論ず

横井時雄君著

○神之顯現

定價上製金三十錢並製二十五錢

基督教果して眞理なる乎、上帝果して存在する乎、基督は果して神子なる乎、之を知らんと欲する者は來りて此書を見よ、之を疑ふ者も來りて此書を見よ、之を信ぜんと欲する者は來りて此書を見よ、此書は目今我邦基督教社會に於て說教者として、傳道者として、篤志能文の學者として鋒々の名ある横井時雄君が其該博なる思想誠實なる信仰とを以て全幅の精神を發揮し神は天地萬有にはあらず、エス、キリストにより、明かに人間に顯現せることを論究せられたるものにして引證縱横、立意精深にして文字亦明快流麗誦す可きものあり、苟も之を一讀する時には基督教の根本たる一大疑問を解するに於て何かあらん、蓋し宇宙とキリストとは神の顯現せる一大明鏡にして此書說き得て殆んど餘蘊なし

小崎弘道君著　島田三郎君敍　億富猪一郎君題

○再增補　政教新論

定價廿五錢

目次○第一章（緒論）改革の時代○第二章、我國政教の思想○第三章、儒教の性質○第四章、儒教の利害（第一）○第五章、儒教の利害（第二）○第六章、儒教用ふ可らず○第七章、宗教道德の必用（第一）○第八章、宗教道德の必用（第二）○第九章、儒教と基督教○第十章、基督教と文明（第一）○第十一章、基督教と文明（第二）○第十二章、基督教と改良○第十三章、教會と政府○第十四章、一己人と社會（結論）●附錄○基督教を信ずるの理由

小崎弘道君著

○基督教と國家

●定價八錢
●郵稅貳錢

基督教が一般人心の上に及ぼす感化の勢力は早く世人の認知する所にして其實際に大用あるとの嘆辭は往々にして佛徒の口より出つ左れば今日に在て基督教に關する最終の疑問は唯だ「基督教の教義が國家に對する關係如何」にあり彼の無知なる異教者の謗毀し守舊的一派の學者の論難し、併せて誠實眞理を求むる未信者を其從ふ所に迷はしむるも亦た唯だ此の一疑問に在るなり、今本書の著者が十餘年來の實歷に由て偏く是等の異論駁難を觀察し迫害の種美を辯斥し具に論者の唱ふる如く基督教の教義が一家室に不忠なりや、國家を愛せざるや、不義にして鄕黨團結の力なきや、不倫にして一家間族の親なきや、諸々是等の疑問解釋し得て甚だ明白なり殊に著者の謹嚴なる态まに小冊子語るを得たりと雖も措辭皆な要緊を得たり殊に著者の謹嚴なる态まに自家の意想に一任して放言高論することをなさず一段一節盡く聖經に基くを見れば實に基督教の解釋者として信憑すべき餘りあり信者は之を讀てより〳〵國家的の觀念を發ひ自ら進で此の日本國の濁氣を掃除すべく未信者は之を讀て最終の疑問決定し速に眞理の門戸に入ることを得ば獨り弊社の喜びのみならざるなり

小崎弘道君著

◎再版 信仰之理由

定價金十五錢

本書は左に列記の目次に從ひ著者此教を信ずる理由を記述せるものにして、世の道を求むる者に於て少補なくんばあらず

第一章 宗教總論○第二章 神の思想及其原因○第三章 神の存在○第四章 人類と神の存在○第五章 天啓及其必要○第六章 基督の神性○第七章 奇跡及其効用

小崎弘道君序　増野悦興君著

◎英國清教徒記事

定價金二十錢

悦興増野君は基督教徒中に從て殊に英國清教徒の體風を慕ひ自ら清教徒の實を顯はす人なり今君にして此著ある必ず清教徒の精神を充分演述し得たる疑ふ可らず一讀此書を讀む者をして當然感興起せしむることあるや疑ふ可

小崎先生ノ序文

余輩は固より「カーライル」の加く「クロムウエル」を神明するに非ずと雖も嘗に清教徒振立の事業を國勢して措かず益ら此英國内乱の記錄が編輯せられん事を希望す今茲者増野氏が此英國清教徒記事を著はせるを見るに「ピウリタン」(清教徒)の起因より「クロムウエル」の長逝まで之を簡明快活記述して陰に勤美の意を其中に現す亦此内乱の記錄を編輯したる

國民之友 批評

奥野昌綱著　石川殘花著

定價八錢　郵稅一錢

◎讃美歌てびき

吾人基督信徒に取りて讃美歌の必要有益なるは今日殆事新らしく喋々を要せん然

れども吾人讃美歌を誦するに於て其口調の古韻を踐むと又た叙事の異國に屬するとを以て往々其意味を解するに苦しむことあり夫のみならず此歌は如何なる場合に如何なる人が作られたるかを知らざるが爲め幾千金の玉も其由來を聞かざるに於ては唯通常の瓦石に少し光輝ある位の感じに止まらん嗚呼吾等朝に夕に神に交り信仰を燃し喜ぶ時は悲しむ時に唯一の好伴侶たる讃美歌其者にて一層其由來を知り一言一句も決して苟且ならざるを解するに於て夫に依つて得る處の感動利益実幾多ぞや是本書の出づる所以にして又本書の目的なり然して毎章作者の傳記を附せられたるを讀みて之を味ふで當時の情況と同想し神の榮光の妙べなるを感じて湮然涙に咤ぶの時あらん嗚呼熱信なる詩人にして初めて熱信なる詩人の情況を寫す事を得眞に大方の諸君に以て活ける清泉を汲めよ

藝州漁史譯

◎基督教防衛論

定價金二十錢

目次●序論●聖約聖書に對する抗論○第壹章紀事、年代、其他に於ける擅着齟齬○第二章科學、博物學及び奇跡と稱すべき事に關する難問○舊約聖書中の道德上の外見的難問●新約聖書に對する抗論○第一章奇蹟○第二章四福音書の正眞純粹なる事●基督教の全體に對する抗論○第一章基督教の教義及び實行○第二章贖罪の教義に關する抗論●附錄○聖書は日常の言語を以て記され、科學的言語を用ゐず○世界の創造○大洪水前人類の長壽○方舟中の動物○大洪水の廣袤○言語の混亂○ヨシュアの奇跡○エリシヤ及び彼を嘲弄せし者○奇跡は信ずべからざるものに非ず○古書證あり○超人的にして超理的に非ず○異能及び休徵○奇跡を以て眞理を證す○例外なる異教徒の柔和○不信説の困難●以上

小崎弘道君校閲　池本吉治君抄譯

○派會衆 教會政治摘要

定價十五錢

本書ハ宗教改革以來會衆教會（コングレーショナル）の歴史、其政治教理禮拜執務利益等を列記せるものにして會衆教會の性質政治を知るに於て少補あくんばあらず牧師加藤發君撰

○改革教法 マルチン、ルーテル傳

定價五十錢

この書は獨逸有名なる學者が編輯せし所の書冊を參看し之に自家の意見を加へて撰まれたるものにして其項目は之を分ち第一章教法改革の來出○第二章ルーテルの出生及び其教育○第三章ルーテル修道院に入る○第四章ルーテル、ウイテンボルグ大學に教官たる○第五章ルーテル公然法皇に抗す○第六章ルーテル筆硯に從事す○第七章ルーテル、ウォムス彈劾の議院に出づ○第八章ルーテル籠城の士となる○第九章ルーテル永眠に就く○第十章教法改革の完成○第十一章教法改革の諸事を準備す○第十二章教法改革を論す」とせられたり當時の事態を論して吾國の現情に比し創見の著るしき者多くその名は傳記なれど實は一種の論文にして少しく事理に通じたる者の讀讀するには至當の價値ある著述なりと謂ふ故に之を閲するに於ては啻に意卓るにルーテルを言行を知悉するのみならず大に信仰を助け敬度の德を養ひ有爲の精神を發動するの益あるもの……極美製

英國法學博士ジェームス、レング著
日本　櫻井恒太郎氏譯

○基督教及儒教 本分論

定價四錢

基督教及儒教何れか人の歸依すべき者なるか、若し兩教が人間の本分に就て教る所を對照比較せば其優劣自ら明かあらん、本書は即ち此點に關する兩教の所說を最も公平に精細に比較對照論究したるものにて加ふるに譯者流暢の筆を以てしたれば一讀して兩教の優劣瞭然たるものあり、

田村直臣著

○新約註釋全書

全部七卷

Commentary on the New Testament.

大形洋裝石版着色刷美本每冊四百餘頁總紙數三千餘頁每卷石版圖畫挿入故事典繪解十數個入引照索引書入レ用餘白附

明治二十四年五月ヨリ隔月一回發兌向一ヶ年間ニ全部完了ス

第一編 馬太傳

豫告通リ　五月三十日發兌ス

正價〔一冊金五十錢○全國一般無遲送料御注文ハ一切前金ヲ要ス
〔全部引續キ購讀ノ方ヘハ六卷迄賣本後七篇ハ無代價ニテ送付スベシ

○日曜學校用 教の札

「一包百枚入」
（彩色入木版摺）

定價十五錢

從來日曜學校に於て用ひ來りし教の札を見るに其種類頗多なるも大概花ワクの間に文字を印刷せし者か然らざれば花鳥の間に聖語を抑みし者にして其圖も其語も全く別物なるが故に未だ文字を知らざる小兒に取りては折角聖語を暗誦するも其意味を解するとなく又其字を讀み得るも給畫は以て其感情を誘發するの功あるとなし若し代ふるに聖語繪畫一致の札を以てせば其句を覺ゆると共に其繪を見るが故に一層教師の說明に感動する耳ならず大に其記臆を助くべし是弊社の此度新たに版を起

し語と畫と一致の敎の札を印刷せし所以なり大きさは從來の品に比すれば殆ど倍にして彩色は殊に鮮明各校に於て之を試みらるゝことを得は幸甚

●安息日學校用書

○安息日學校讀本卷ノ一定價十二錢郵稅二錢
○仝　卷ノ三　定價十三錢　郵稅四錢
○仝　卷ノ五　近刊
○敎の組地圖　定價九錢　郵稅二錢
○子供の頓智　定價八錢　郵稅二錢
○聖書史記問答　定價十錢　郵稅二錢
○童子聖書問答　定價十錢　郵稅四錢
○福音初步　定價廿五錢　郵稅四錢
○初學問答　定價二錢　郵稅二錢
○仝　卷ノ二　定價八錢　郵稅二錢
○仝　卷ノ四　定價十七錢　郵稅四錢
○敎のかるた　定價十五錢　郵稅三錢
○敎の綴字　定價十九錢　郵稅四錢
○聖書問答　定價二錢五厘　郵稅二錢
○幼稚之乳　定價八錢　郵稅二錢
○童蒙圖解聖經略史　定價卅五錢　郵稅六錢
○童蒙例訓　定價十五錢　郵稅四錢

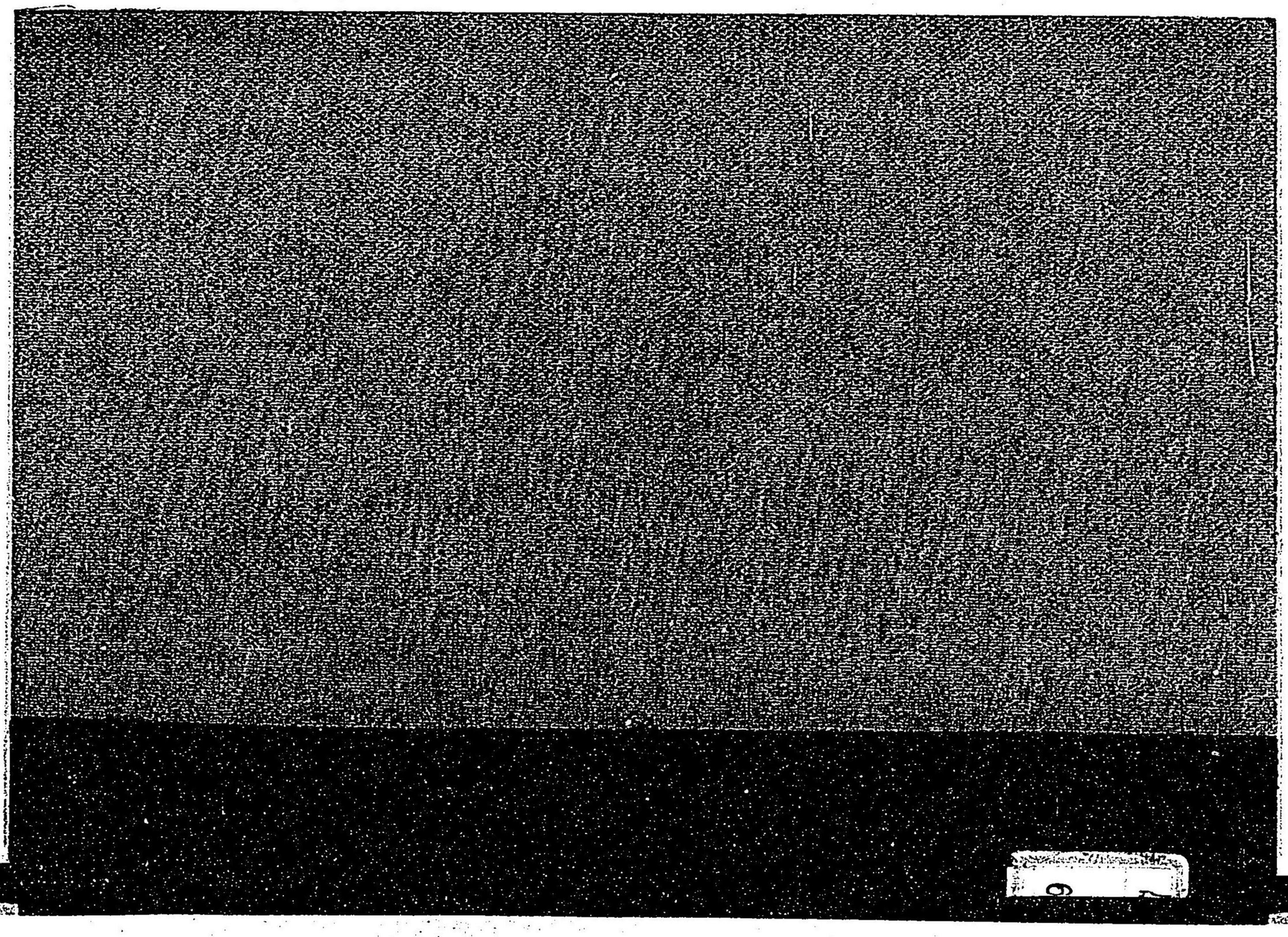
發賣所

東京々橋區出雲町壹番地　警醒社書店

大賣捌所

大坂土佐堀三丁目三十八番　福音社

ex 329



020569-000-1

特29-897

基督の心

松村　介石／著

M24

ABI-0383